
地獄 アドベンチャー

クローバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄 アドベンチャー

【Nコード】

N7740C

【作者名】

クローバー

【あらすじ】

俺は、鈴岡中学校の三年、天野明人です。9月26日生まれのB型！俺は、テストで17.8点とってしまっぐらい馬鹿です！！そんな俺がいきなり意識不明に！目が覚めたら、そこに待ち受けていたものは！？

プロローグ

ここは、鈴岡高校。

そして……、

「テストがえしいいい！」

「俺は人生の中で、二番目にテスト返しが嫌いだ。」

この一人でぶつぶつ言っている少年は、天野明人。

「なに一人で言ってる！天野！！テストだ。」

「ふあゝい……。」

明人は、おそろおそろテストに手をのばした。

そこに書いてあった点数は……、

「！17・8点??？」

「だって天野、名前の所<天野>としか書いてなかっただろ？」

(たしかに……。)

「だからって、0・2点だけひくって!?!?おかしいよ!?!」

「一文字無いごとくに、マイナス一点」

(じいちゃん)

++++下校時++++

「はあ〜。17・8点か。やばいなあ」

ため息をつく明人。

「……………のど乾いた！お茶！」

早速お茶を選んで……

がこん！

明人は、早速飲み始めました。

「ぶはあゝ やっぱおいしい！」

「あんね？くらくらする……。」

ばたっ

「……きゃあ……！！明人がたおれたあ！」

プロローグ（後書き）

こんにちは！クローバー です。小説を書くのは、初めてです！
いろいろおかしい所があると思いますが、気にしないでお読みくだ
さい！あと漢字もすくなくいですう。まあ、よろしくお願いします
！

第一話 地獄

「おい。」

(あーなんか聞こえるう〜。)

「……ちっ」

(ち!?)

げしっ!ボカツ!ゴキヤツ!ぶしゅううう……。

(痛い!痛いよ!!血があ……。)

「おい!」

「はいい!」

目が覚めたら、明人は知らない場所にいた。
ただ、なんとなく暑かった。

「あつあなたは?」

明人の前には、ロングヘアの女の人立っていた。

「普通は、そっちから名乗るもんだ。」

「あ……はい。」

なんとなく頭があがらない明人。

「あまの あきひとです・・・。」

そういつて、地面に漢字を書いて見せた。

<天野 明人>

「ふうん。私は、さきい ゆりか だ。」

<咲伊 百合花>

そういつて自己紹介を済ませた。

「あ・・・・・・・・。」「じつて、どじつ？」

「・・・・・・・・。」

百合花は、うつむいてしまった。

「？」

「じつは・・・・・・・・。」

「地獄。」

「へ？」

「地獄だ。」

明人は、キョトンとしている。

「うそ？俺死んでないよ？」

「私もだ。」

「ならなんで？」

「わからん……。」

百合花は、またうつむいてしまって、
明人は、ただただまばたきをしているだけだった。

(なぜか嘘じゃないってだけは、分かる。百合花がうつそついている
かおじゃないし……。)

百合花が、歩き出した。

「どつどついくの?」

「大王がいるはずだ。」

「は?」

「地獄があるんなら、大王もいるはず……。」

「おお!」

「そして……。狩る。」

明人の背中が凍りつく。

「まあ、大王のそこへ行けばなにかわかるだろ。」

「なら、俺も行く！まだ死にたくないし！！」

「ふっチーム結成だ！！！！」

チーム結成！！

第二話 三人目ゲット！？（前書き）

こんにちは。クローバーです。

第一話のサブタイトルが抜けてました。すみませんでした。以後気をつけますんで！！

第二話 三人目ゲット!?

「ねえ、ねえ!百合花っ」

明人が百合花に話しかける。

「なんだ?」

「あの……。」

「なんだよう!」

だんだん百合花が、いらだつ。

「どこにいけば、大王にあえるのかなあ〜って」

「……。」

「……。」

「あのなあ?明人。」

百合花の顔がひきつる。

「は〜い?」

「あのだな! (とりあえず) 鬼たちの言うことを聞いてな、情報を集めると

(たぶん) 大王に会えるという作戦だ!」

「うん。小さい声で、たぶんと言わないでね」

でも（百合花って面白いな）とか思う明人でした。

「すまん。」

「うん。あと・・・、」

「鬼居なくなつたよ？」

「あ・・・。」

（やっぱり面白ッ・・・！）
必死に笑いをこらえる明人。

「ひつ一人ぐらい居るはずだ！探そう。」

慌てる百合花。

「ほっい」

「私は、こっちを探す。」

そついつて百合花から見て、右のほうを指差した。

「ふうん。なら俺はこっちだね！」

そういつて二人は左右へは走りだした。

+++ 明人方面 +++

「お〜にさん」

なぜか明るく呼ぶ明人。

「お〜に〜さんへ〜んじして」

そういつと・・・

「はあい」

誰かが来てくれました。女の子です。

「？」

「鬼じゃないよ。人だよん。」

なんか言ってきました。

「あつそ・・・。」

冷たい反応をする明人。

「ぎゃんっ!!」

ショックを受けた様子。

「てゆうか、ここどこ？」

「へ？地獄。」

「ぎゃんっ!!」

「実は……。」

* * *

「へえ！？死んでないのに地獄来たってわけ？」

説明してあげました。

「うんうん。」

「打撃！大王！！かつこい~~~~ よし！私も行く!!」

「うん。」

(?)

「ええええええええ!!??」

軽いノリで思わずOKしてしまった明人。

「大丈夫なの？」

「うん」

仲間一人ゲット！

〈次回は、百合花方面編〉

第二話 三人目ゲット!? (後書き)

コメントを下さい!~どんなことでもいいです。よろしく願いします

第三話 百合花と鬼さん（前書き）

こんにちは！明人です。

急に寒くなりましたね。風邪ひいてませんか？

俺は元気です！！

では、どうぞ！！

第三話 百合花と鬼さん

+++百合花方面+++

「鬼……。どこだ？」

一人呟く百合花。

ガタツ！

「何の音！？」

振り向く百合花。

「ぼっ僕は、鬼です……。。」

角がついた、同い年ぐらいの男の人出てきた。

「めっけ。」

「はあ？」

何のことか分からない鬼さん。

「鬼！質問が二つある！！」

「あ……。はい。」

おびえている様子。

「質問一、なんで死んでないのに私がここにいる？」

「ああ……。今の大王のせいです。」

「聞かせる。」

「はあ……。」

先代の、大王様が次の大王に、座を渡したんだ。

けど、次の大王は天国に行くはずの人を地獄に送り込むようになったんだ。

そしてとうとう生きている人も……。

「むかつくね。」

「あ……ははは。」

「まあ、大王が手始めに中学生の、適当に選んだ代表を送ったって
言っただけど……。貴方だったんですね。」

「……。」

「……。」

「うれしそうにいなあああああ！」

どぎゃああん！

百合花の強烈なパンチがくり出された。

「痛いですう。」

「質問二、二二二二二。」

鬼がぼかんとする。

「えっと・・・地獄の入り口です。一週間に一度、地獄トロッコに乗って地獄に行くんだ。」

「さっぴー、まじっ一個言わせてっ。」

「はあ……。」

「あんだ鬼じゃないでしょ。」

「え……?」

びっくりする鬼。

「だからこいつ鬼じゃないって言うてるだろ? ナレーター!」

「すみません。」

第四話 レオ君

時間をもどって・・。

+++ 明人方面 +++

「あんれー？百合花いないよ？」

「ふうん。百合花っていうんだ。もう一人の子。」

百合花捜索中の二人。

「こつちだよ？百合花つて子。」

「何でわかんのか？」

びっくりする明人。

「えへへ 霊感あんの。」

「すっげー！！！」

「そついえば名前なんていうの？」

「森野実古」

(作者) あつもりのみこつて読むんだよ

+++++

「いた！百合花！！」

「だれかと話してる……。」

近くにいく二人。

「鬼？かな？？」

「ふふふ 盗み聞きしよーよ！」

びくつとする明人。

「おっ俺は……。」

言い終わる前に引きずりだされた。

(あああああああ！！！)

「あんた鬼じゃないでしょ！」

(百合花……。なに言ってるの？鬼じゃん。)

鬼「そうだよ？けど、なんで？」

鬼の角が取れる。鬼といっても、人間に角をつけた物っぽい。

百合花「いわなきやだめ？」

(駄目に決まってるんだろ！？)

「まず、あなた結構、身分高いよね？」

「はい……。」

「なんで高いってわかったんです？」

「えー！。高くないのに、大王の企みなんて聞ける？」

黙り込む(仮)鬼。

(すっすごい！！頭いい！？)

「後、鬼じゃないって分かったのが……、」

みんな息をのむ。

「勘なんだ。」

「はあああああ！？」

百合花が、思わず飛びだしてしまった明人を睨む。

「あ・・・あのっ」

明人の背中に汗が流れる。

「まあまあ！ごめんね！私が盗み聞きしよっていったの。」

「・・・！？」

（まあ、居たのは知ってたけど・・・。明人を外に出そうと思って嘘ついたんだ。

読者さんには教えます。鬼じゃないって分かった理由。

まあ、身分高いのに、門番なんてしないでしょ？普通の鬼も居ないのにさ。）

「あ・・・！ハジメマシテ！実古です」

「・・・！しらんっ」

「ええ？」

シヨックを受けた実古。

「そんなっそんなっ！実古ちゃんシヨックだよ!？」

「何だよそれ!!」

「まあ・・・。」

「あ！（仮）鬼！！」

「……なんか（仮）っていうのめんどい……」

明人が呟く。

「名前は？」

百合花が聞く。

「あっ！レオ・セイタです。」

「レオ……ね。」

「はい！！よろしく。」

「……あの。」

レオが何か言いたげだ。

「実は僕……」

「大王の弟なんです。」

第四話 レオ君（後書き）

クローバー です！急なお願いですが、コメントの所に、好きなキ
ヤラを、二人書いて下さい！
ランキングを作りたいのです！期限はありません！
お願いします。

第五話 武器（前書き）

すいません！キャンプがあるので、一週間休みます。
その間、コメントがもらえたらうれしいです！

第五話 武器

「大王の弟！？だからか！身分高いつてわけ！！」

はしゃぐ明人。

「あ・・・あの！皆さんに役立つように、武器を・・・。」

「わあ！うれしい」

「はい。明人さん。」

明人には、小さい剣が渡された。

「はい。百合花さん。」

百合花は・・・鳥？

「鳥？」

首をかしげる百合花。

「ペーペー。」

鳥が鳴く。

「ペー！？どんな鳥だよ？！」

「・・・・・・・・。ペーちゃん。」

「！」「！！」「！！！」

驚く一同。

「あ……はは」

力なく笑うレオ。

「えっと……実古さん。」

「！？」

「なんじゃこりゃあああ！？」

実古に渡されたのは、一本の木の棒。

「まあ……。使ってるうち分かります！」

「では！僕はここで！」

「いっちゃんんだ……。」

「皆さんの力になってくれそうな人が居たら、僕が言っておきます。」

「ありがとう！」

「なに？これ……。」

実古が指差した先には・・・

「!?!」

「月の紋章?」

「はい! 仲間のしるしです!」

「なるほど」

「おお! これなら仲間が分かるよ!」

「あノノノ。。。」

「?」

「鬼たちは、大王の言うことを聞いてるだけなんです・・・
悪く思わないでやって下さい」

「おーけー。」

「分かった！」

「らじや！」

「では！頑張ってください！」

レオは皆と握手をした。

「なぐんか私ら勇者だ！」

「さようなら……。」

そういつて、

レオは闇の中に消えていった。

第五話 武器（後書き）

次からキャララの伝言板始めます！

第六話 人質く変態鬼さんとtogether! (前書き)

こんにちは！戻ってきました。
がんばって書きましたあゝ！

第六話 人質と変態鬼さんとtogether！

「うわあああああ！」

時を少し戻して・・・。

+ + + +

血のおいがただよう地獄。

三人は仮眠をしていた。

『こいつらか？大王にはむかってるといふガキは』(ヒソヒソ)
『オウ・・・。』(ぼそっ)

いつの間に三人が寝ているすきに鬼が来ました。

『人質をとって見ないか？』(ヒソヒソ)
『ナイス！』(ヒソヒソ)

おや？鬼さんが何か話し合っています。

『どっちの女の子にする??』(ヒンヒン)

なに言ってるんですかアンタ。

『どっちもタイプだぜい』(ヒンヒン)

……ふざけんな。

『まあ、俺てきに……どっちのショートカットの
子がええな。』(ヒンヒン)

もうやめて??

『いやーこのロングでしょ』(ヒンヒン)

……。「つかれた。」

『よおーし!ならロングで!』

『せえーのっ』

がばあ！

『ほかあーく！』

「な！？うわっなにこれ！！」

百合花がおきました。

「どうしたの？百合花……って捕まってる！！」

実古は、熟睡。

『ふはは！大王の言うことをきいて大人しく地獄へ行くんだな！』

「いやだ！」

『いーぜい 二の子もらってくよん。』

「おい！鬼！！」

百合花がいった。

「運ぶんなら丁寧を持っていけ。」

『は……。あ。』

ぽかんとする一同。

『えっと……。まあもらってくー!』

「まっまで!」

もう遅かった。鬼たちは走り出していた。

「おい!鬼!落とすなよ?」

『はいはいはい!』

「……。。」

「うわあああああ！！」

++そして今++

「百合花が連れて行かれたあ！」

「なつなに!？」

やっと実古が起きました。

「百合花が！人質にい〜!!！」

「ほえええええ!？」

「……。鬼……。勇氣あんね。」

いーや。ただの変態です。

「あああー!どどどどど」

「あ！そういえば……。」

実古がなにか取り出しました。

「ばばーん地獄マップ！」

「どら もんかよっ」

おお……シシッ！！。

「でもなんで持ってたの？」

「ははっレオ君に貰った！」

早速ひらげる二人。

・鬼の宿・

「……？」

「えー。ここは寝るときに帰ってくるんじゃない？」

「私たちがいるのは、地獄の入り口っしょ？」

「うん。」

「なら、入り口の中にある建物は、ここだけだよ。」

・地獄監視室・

「ここについてみよー！」

「うんー！」

二人は地獄監視室に向かって歩き出した。

第六話 人質と変態鬼さんとtogether! (後書き)

キャラの伝言板

++ 第一回 明人 ++

こんにちは！明人です！もうすっかり秋ですね
俺は皆さんに、キャラのプロフィールを聞くよ！

NO.1 百合花

「よろしく。」

「身長は？」

「156センチ。」

「体重は？」

「・・・シークレット」

「何月生まれ？」

「9月2日」

「んーと学校と学年は？」

「青香中学校三年生だ。」

「わー！名門中学校じゃん！」

「では！また次回！」

第七話 優君（前書き）

こんにちは。

実は私、摩璃藻さんと親友でっす

彼女は、面白すぎです。

I A H（いかにも 暗殺しそうな 人）ですね。
はい……。

では！小説どうぞ！！

第七話 優君

二人は地獄監視室に向かって歩き出した……。

「かつこいいねえ」

「うん。」

「でも……。」

「現在地分からない……!!」

「どうすんの？明人！」

「えー！。」

なやむ二人。

「あれ？誰だろう・・・。」

明人が指をさした先には、黒髪の男が立っていた。

「すいませ〜ん。」

話しかけてみた。

「ん？」

「あのう・・・んん!？」

「？」

「あ！それって！」

男は、月の紋章がついたヤリを持っていた。

「レオって人にもらったんだあ」

「ふうん。」

「あああ！もしかして君達がレオって人が
言っていた仲間？」

ビクビクしているようだ。

「うん。」

実古がうなずく。

「貴方は何ていうの？」

明人が聞いた。

「んーと。」

（なぜ考える！？）

「優！」

「俺明人。」

「アタシ実古！」

「よろしく〜」

++その日++

「鬼！」

百合かがいう。

「はiiiiiiii！」

おびえる鬼達。相手が、悪かったね。

「茶。」

「はiiiiiiii！……！」

+
+
+
+
+

「優君！」

「？」

「地獄監視室って、みた？」

「見たよ。」

さっさと答える優。

「どっさっ。」

「えっと・・・あっちだ！」

「ー」

第七話 優君（後書き）

くキャラの伝言板く

第二回 明人

明「第二回も、キャラ紹介です！」

実「よろしくう」

「身長は？」

「152.2！」

「誕生日は？」

「12月の6日！誕プレ頂戴ね！」

「血液型は？」

「A」

「学校は？」

「幸洋高校！」

「では、次回！！」

（実古って、作者と似てます。）

第八話 打撃！鬼！〜もう一つの顔〜

どこまでも、広がる地獄。

「はひい〜。あとどんだけえ？」

「もうちょい。」

「実古がんばって！」

三人は、もう30分ぐらい歩いていた。

「あ！あそこ！」

優が叫んだ。

三人は、まず近よってみることにした。

監視室だから、小さな小屋みたいな物だった。

「窓から見てみる……。」

実古がひょっこり窓を覗いてみると……

「鬼！椅子。」

「どござー!」

「茶。」

「はいいい!」

実古は、言葉を無くした。

「実古、どうだった？」

明人が聞く。

「……大丈夫そうだったよ？ていうか、
快適そうっていつか……。」
(「いよいよいよ」)

「まっ元気ならいいんちゃう？」

「そっそっ!」

「……」

「なら、まず俺が中へいってみる。」

明人がいった。

「無理なら援護へ行くよ。」

「OK！」

きいいい。

ドアを開けた。

『だれだっ……ってさっきのガキじゃん』

明人は、小さい剣を握って構えた。

鬼も構えた。

『はん！お前みたいなヘナチヨコにこの女を助けられっかよ！』

「……。」

相当悔しいらしい。

『お前の仲間はどうした？』

『逃げたんじゃね？へナチヨコの仲間だし。』

鬼は、言いたい放題。

『あの、ショートカットのぎゃあぎゃあうるさい女はどこいった？』

どうやらこの鬼達は、百合花をさらったやつとは違うようだ。

「……。」

『やつは逃げたんだあ〜〜！！』

ぶちいー！

「ふふふ。ずいぶんいたい放題ですね。」

『『！！？』』

なにか様子がおかしい明人。

「さっきから、僕の仲間を馬鹿にしてくれまして。」

ぞくっ！

「お仕置きがしつぷうですわ？」

『……！』

すっす

明人が小さい剣を出す。

「では。」

どすっ どすっ

明人は、鬼達の腹に一回ずつ剣を刺す。

しゅっしゅっしゅっ

どうやら明人は、この剣は魂を浄化させる物だと分かっていたようだ。

「おや……。終わりですか。」

「終わったよー！」

「明人！百合花！無事だったんだ」

「よくやった。」

「ん？おっお前は！！」

百合花が叫ぶ。

「あ。この人は……。」

「優ー！ー！？なんでここにいんの！！？？」

「きちやった。んー百合花かわいい」

優・・・変態すか？

「知り合いなんだ・・・。」

「死ね！」

どし！

強い蹴りをいれた。

「あ・・・う・・・てゆづかもつしんじやってるよね・・・。」

「うっさい！！」

仲間が増えましたとき。

第八話 打撃！鬼！〜もう一つの顔〜（後書き）

〜キャラの伝言板〜

第三回 実古

「やほ〜い 私のコーナー！」

明「でも、宣伝じゃん。」

「ぐう……。」「

「まあ説明するね。このコーナーは、
地獄アドのキャラに質問をするよー！」

明「質問がある方は、コメントに書いてくださいー！」

「このコーナーを使って、答えるよー！」

「じゃーねー！」

第九話 トロッコ(前書き)

短いです。

コメントありがとうございました！

……。ってコメントくれたの、弟でした。

(ワラ)

まあ、皆さんもドシドシおくらってね！

第九話 トロツコ

「なんで優がついてくんの!?!」

ぴりぴりしている百合花。

「なんでってレオ君が選んだからに決まってるじゃん。」

やさしく答える明人。

「まーまー! 落ち着いてよ百合花ちゃん」

「うぜー!」

どしっ

百合花は、強いけりを入れてやった。

「あはは! にぎやかあ〜!」

と実古。

それに反対で

(うれしくない!)

とか思う百合花でした。

「地獄監視室にあったモニターを使ってまたきそうじゃない？」

「だいじょーぶ！俺が、壊しといた！」

何気に怖いですよ？

「ナイス！」

ノリノリな実古。

「ねえねえ。」

「なんだ？」

「なに？」

「ん？」

「とりあえず、地獄・・・行って見ない？」

明人が言った。

「ここにいっても大王に会えそうにないし・・・。」

「私は、いいわよ?」

「私もー!」

「俺もだ。」

「よし!トロッコに乗ろう!」

そういつて四人は、トロッコに乗り込んだ。

+++++

「んゝまだ? 明人おゝゝ。」

「もう少しだよ! 頑張れ実古!」

「ふにゃ・・・。うん!」

(かつこいいなあ)

がたがたがた・・・。

トロッコにのって一時間後・・・

「おお！前が！」

「あそこか・・・。」

「じくじり。」

「ドキドキするぅ〜！」

四人は、赤い光の中に包まれていった。

第九話 トロッコ（後書き）

くキャラの伝言板く

第四回 明人

「今回は、優です！」

「ん？百合花はいないのか？」

「身長は？」

「175あるな。」

「誕生日は？」

「10月25日」

「！！！」

「学校は？」

「百合花とおんなじ！」

「ありがとう〜！」

（皆さん！優の誕生日もつすぐだ！！10月25日までに、メッセージをプレゼントしよ！優がお返事するからね！）

第十話 伊奈さん (前書き)

早いこと、もう十話！これからもよろしく！

第十話 伊奈さん

「わぁ……。」

「ここが……地獄？」

「すっげ……。」

「わお！」

四人がたどり着いた所……。そこは四人が想像していた物とは程遠かった。

四人の前にあつた物……。それは

「……学校!?」「……」

学校があつた。その横に寮があつて、さらにまたトロツコがあつた。

「久しぶりです……。」

「!!!レオくん！」

そこには、レオが立っていた。

「人は、死んで魂になるでしょ？その中で、天国行きと地獄行きにまず分かれるんだ。」

「へえ……。」

「地獄行きは、次に鬼試験に受けるか、生まれ変わるまで地獄で暮らすかに分かれるんだ。」

「鬼試験？」

「はい。合格したら、鬼になれるんです。」

「いやだあゝそれ。」

「でも、地獄での暮らしはすごくつらいんです。最低、生まれ変わるまで10年はかかりますし。」

そのとき

「そーなのよ！」

次の瞬間かわいらしい水色の髪をした鬼がでてきた。

「！！」

「あっ！警戒しないでちょうだい。私は、レオの仲間よ。伊奈よ。」

「なんだあゝ」
と実古。

「地獄は、逃げられないわ。その中、大王を狩るなんて難しいよ?」

「それでもお俺はやる!」

「ふふっ頼りになるわあ。」

「え?」

ぽかんとする四人。

「実際私達は、鬼だし、大王に歯向かったら裏切りとして魂こなごなにされるわ。だから貴方達に頼るしかないの。」

「そうスか。」
と優。

「頑張つて! なにかあつたら呼んで!」

「え? 呼ぶつて?」

「ああ。ペーちゃんよ。通信機能つき!」

(すっげー!)

「じゃあ！」

「では！」

四人は、二人を見送った。

第十話 伊奈さん (後書き)

くキャラの伝言板く

第五回 作者

「はっは！コーナーのつとたわい！！」

百「馬鹿」

「次回からだがな！」

百「アホ。」

「明人の性格についてだ！ばいび。」

第十一話 イベント？（前書き）

+ 作者の報告 +

キャラの伝言板のコーナーが全部決まったよ！

明人 明人インタビュー！

百合花・作者 キャラ紹介！

実古・優 質問Q&A

です！ ちなみに、作者の報告は、皆さんに情報を
教えます！ 長々とすいませんでした。

第十一話 イベント？

「ふう〜いつちゃったねえ。伊奈さん。」

「おい。」

百合花がいった。

「なんか・・・むこうの方が騒がしいぞ。」

「伊奈さんかわいかったなあ〜」

「ほんつと!」

無視されちゃいました。

「ごん!」

「いって〜どうしたの？百合花ちゃ〜ん」

「むこうの方が騒がしいなって!」

「本当だね。何かあるのかな？」

「あの、鬼学校からだ・・・。」

「いってみよう!」

四人は鬼学校に向かった。

「!？」

四人が見た物・・・それは・・・。

「ハロウィーン祭り」

「あはは！鬼つておもしろい。」

「うむ。」

「さあ。もう行くよ？」

「あはは！行ってみよう」

「うむ！行ってみたいな。」

明人くん、無視されました。

「行くところ？」

「お～面白そう」

「おかしい～～」

「ふふふ。楽しそうですねえ。」

そして冷たく

「二人とも？行きますよ？」

「にゃ!!!!」

「す……すまん!!」

(ん……きれいな。明人)

百合花は、明人のきれ方をしっています。

「ふつトロッコに乗ろう。」

百合花が言いました。

そしてまた四人はトロッコに乗りました。

+++++

「ここからが本当の地獄だね！」

「そーだね！」

どつちやら落ち着いたようです。

「だが、厳しくなるぞ。」

「百合花ちゃんとtogetherならいいぜい」

どすー！

「うひゃいわ。」

「わー！トロツコで暴れないで！せまいのに！」

+++++

「うわ。。。」

「やっとついたあー！じ・じ・く」

「何優よろこんでるの？馬鹿じゃない？」

(百合花「ええええ！」)

『あ!!あのガキは!!』
『捕まえる!!』』

「え?」

「わああ!!」

第十一話 イベント？（後書き）

（キャラの伝言板）

++ 第六回 作者 ++

作者「さあ！明人の設定を紹介しまっす！」

百合花「私もでるわ。」

作者「明人は、馬鹿だけど、優しい主人公さんでっす！」

百合花「そうだな。」

作者「でも、きれると、なぜか落ち着き丁寧な口調であいてをめったぎり！！ってとこです。」

作者「おわり！！」

百合花「はや！！」

作者「だって・・・いうこともうないしい。」

百合花「では！！さようなら。」

第十二話 迷い（前書き）

こんにちは。今のところのキャラ投票の結果を
言っておきます。

第一位明人 「わぁ うれしい!!」

第二位百合花 「ありがとう。」

第三位レオ 「あっありがとうでございます!」

クローバー 「え〜いいの!? 私が三位で!!」

優 「嬉しいぞ。」

なんか三位多いな……。これからもドシドシ送ってね

第十二話 迷い

「捕まえろ!!」

「え!?!うわぁ!!」

明人が逃げ回る。

「みんなっ逃げるよ!?!」

百合花が、言う。

「ラジャー!」

「うい。」

だだだだだだだ。。。。

幸い鬼が二人だったのですぐ逃げられました。

「ななな!?!やばいやばい!!狙われてるう」

「まあな。」

「はあはあ。。。。まあな。じゃないでしょー!?!優!!」

息をきらしながらもしっかり発言する明人。

「しかしここは地獄の入り口と違うわね。」

「へえー？どこが？」

まったく分からない様子の実古。

「空よ。」

「ん？んん！！」

入り口では見られなかった空がちゃんとあった。
しかも今は、夕方のようなようだ。

「おお。時間があるんだな。地獄って。」

「地獄は転生するまで、生きている間してしまった悪い事を償うところなんだな。」

「何で分かったのぉ？」

質問する実古。

「看板に書いてあった。」

（都合よすぎ！）

「なんか紙が落ちてる……。」

百合花が紙のようなものを拾った。

<メニュー>

「メニュー？開いてみよっ」

カサカサ……。

<地獄メニュー>

・13歳以下10歳以上〓天国への手紙郵便

鬼試験

・13歳以上〓地獄試験

鬼試験

・10歳以下〓転生

「……。」

「はいはい！」

実古が手を挙げた。

「はい。実古さん。」

乗ってみた優。

「地獄試験ってなに？」

「あれだな。血の海地獄やら針山地獄じゃね？」

「こええええ!!」

びびる明人。

・・・貴方なら大丈夫でしょうか？

「なんででしょうか？」

いえ・・・。

「んーどっちに行けばあえるかなあ？」

「よぉーしーじつじつ時はー!」

「!?!?」

第十二話 迷い（後書き）

（キャラの伝言板）

第七回 明人 ++ 明人インタビュー ++

「今回は、レオ君です！」

「あ・・よろしくお願いします。」

「身長は？」

「166センチです。」

「誕生日は？」

「6月8日です。」

「血液型は？」

「たしか・・Bだったと思います。」

「歳は？」

「えっ17・・・。」

「うっそ!!」

「ではまた次回」

「ありがとうございました！」

「よっし！遊びにいらー！」

「ええええええ!？」

第十三話 番外編くお祝いく（前書き）

おお！アクセス20000突破！

というわけで、番外編として、お祝いの時間を
とらしてもらいました。

どうぞっ！！

第十三話 番外編くお祝いく

作者「やったー！アクセスが、2000突破！」

一人騒ぐ作者。

みんな「わー。」

あんまりのつていない皆さん。

作者「……。」

みんな「……。」

作者「もつとのらんかああああい！」

みんな「わああー！」

作者「ふん。というわけで、2000アクセス
突破記念じゃく」

(えらそー。)

しらけている皆さん。

作者「お祝い！というわけで、今から焼肉にいくぞ！」

明人「え？すごい！」

百合花「そんな金あんのか？」

作者「あはは！だいじょ〜ぶ！」

作者「じゃ！移動タイム！」

+++++

「やっとついた。」

お疲れの優。

「あはー！焼肉久しぶり」

はしゃぐ実古

「あれ？実古今日、ツインテールじゃん。」

「えへへー かわいいっしょ？」

照れくさそうにいう実古。

「でもなんで急に？」

「作者が気に入ってるから。」

キツパリいう実古。

「ほら〜入るよお？」

食べる気満々の作者。

「お〜〜〜!!」

カランカラン

「こちらの席です。」

店員さんが、案内してくれました。

からから・・・

「あ〜〜みんな遅いわよ!!」

「伊奈さん!!」

「あっお邪魔してます。」

「レオ君も!!」

みんなビックリしています。

「ふふ。私が呼んだんだよ?」

「作者が?」

「そーー!!!!」

えっへんといばる作者。

「これでみんなそろったわ。」

「ご注文はありますか？」

店員さんが入ってきた。

「ホルモナーー！」

「私は、塩塩タンで。」

百合花が普通に言う。

「なにそれ！！」

「この店の自慢メニューです。」

「そーなの！？」

「なら私は、カルビイー！」

「はい。分かりました。」

店員さんが行ってしまいました。

「あっ伊奈さん！！駄目エー」

実古がいきなり叫んだ。

なんと伊奈がビールを口に運んでいた。

「え？わたし、21歳よ？」

「うっそー！」

ビックリする一同でした。

「暇ねえ。優、なんかいつて。作者がいきなり優を指した。」

「百合花が好きだあー！」

「。げん。」

どすっ

「？ここは好きな人を言うところなの？」

実古がいった。

「なら、私優くんが好きいー！」

「。。。。。」

「。。。。。」

「ええええええ！？」

いきなりの爆弾発言にビックリする一同。

「？」

ニコニコして優を見る実古。

「実古……。」

(あーあ・・実古かわいそう。
)
皆がそう思った。

「好きだあああああ」

「ええええええええええ！！？」

一組のカップルが出来ちゃいました。
作者……キューピット!!!!？

「ふはは。」

からから・・・

「はい！ホルモンと塩塩タンとカルビです。」

「よっし焼きまくるぞー！」

嬉しそうな明人。

じゅっじゅっじゅっ

夜まで食べつくした一同でした。

「ふう〜食った食った！」

満足のようです。

「おい。作者、5万ってこんな金あるのか？」

百合花が聞く。

「大丈夫！百合花に払ってもらっで！」

「はぁー！？おいつ作者！！！」

もうみんな居なかった。

「くっそおお！」

その声は、店内に響きわたった。

第十三話 番外編〜お祝い〜（後書き）

〜キャラの伝言板〜

番外編 ？

明人「お！これも番外編！」

作者「へへっ」

実古「あのねえ、私の髪型、摩璃藻先生が考えてくれたんだよお。」

三人「ありがとうございます！！！」

第十四話 肉じゃが (前書き)

おお！？人気投票に変化が・・・。

一位 百合花 「おっ人気になってきたか。」

二位 明人 「やったあ。」

三位 作者 「うれしい〜〜！」

四位 レオ 「！照れます・・・。」

伊奈「私にも票を〜〜」

第十四話 肉じゃが

「よぉーしー!」こいつは……。」

実古が叫んだ。

「レオ君を呼ぼう!」

「でも、どうやって?」

明人が聞いた。

「ペーちゃんだよ!」

実古がペーちゃんを指した。

「おお!通信機能つきの!よくやった!実古。」

百合花が珍しく実古を褒めました。

「えへへ〜」

「百合花かわいい!」

どしどし!」

強い腹蹴りが入った。

ん……?この様子では……優は、

「（友達として）好きだあああ！」

と言ったんでしよう。

あらら？実古もまだ、両思いとは思ってないようです。

「ペーちゃん……。」

百合花がペーちゃんを呼びました。

早速通信をするのでしょうか？

「ペーペー。」

「レオ君と、通信つないで。」

百合花が言った。

ジュジュッ……

『あー。百合花さん？』

レオの声だ。

「そつだ。一つ聞きたい事があるんだ。」

百合花が話し出した。

『何でしょう？』

「大王ってどこにいる？」

『……』

「……」

『明日、そちらに向かいます。』

「OK。」

『では……！』

ぷっつーっつー……。

通信が切れた。

「明日かあゝもう暗いしね！」
明人が言った。

「晩飯……！」

優が叫んだ。

「何にするう〜?」

実古はもうお腹が空いたようです。

「その前に、食材がないだろ。」

百合花がびしつと言った。

「あ……。」

今、分かったらしい。

「みつんなあ〜!」

「伊奈さん!」

伊奈が袋を抱えてやってきた。

「食材持ってきたわよ! 貴方達は、今の所
逃亡者だし。」

「それなあに?」

実古が、袋を指差した。

「ああ! これ? 肉じゃがの材料! 私、作れないの。」

皆で作ろう。」

伊奈さんが元気よく言った。

「どこで作るんですか？」

百合花が聞いた。

「あ……」

「伊奈さん！
叫ぶ明人。」

「んーと、あ……この近くに今は使っていない
鬼の寮があるの。そこに行こう。」

+++++

「ボロイ……」
優が呟いた。

「あは……私も住んでいたことあるのよ？」

少し怒りっぽく言った。

「あつすまん……。」
優が謝った。

「中に入るお〜」

と言いながら実古が入っていった。

「お〜」

皆が入っていった。

「よお〜し！肉じゃがだあ！」

明人がやる気満々です。

早速みんな作り始めました。

「あれえ〜？魚は？」

肉じゃがに魚・・・？
大丈夫でしょうか？

+ + + + +

「出来た!!」

嬉しそうに持ってきたのは実古です。

おいしそうな匂いが部屋中ただよっています。

「いただきますーす!」

初めての晩ご飯でした

第十四話 肉じゃが（後書き）

くキャラの伝言板く

第八回 明人 + 明人インタビュー +

「今回は、伊奈さんです。」

「あら。よろしく」

明「え」と身長は？」

伊「たぶん、160センチぐらいね。」

明「誕生日は？」

伊「8月4日！」

明「血液型は？」

伊「B！」

「ありがと〜〜！」

優に、お祝いの言葉をくれた方、ありがと〜〜ございます！！
優「嬉しいぞ。ありがと〜。」

第十五話 トースト（前書き）

うう・・・風邪を引きました。けど頑張って二話更新しました！
だれかあゝヘルプミイ~~~~！

第十五話 トースト

地獄に朝が来ました。
気持ちのいい朝です。

「んー！。」

おや？はじめに起きたのは、明人です。

「みんなっ起きて！」

「・・・おはよう。」

百合花が起きました。

「おはよう。」

明人がにっこりと挨拶をしました。

「おーきーてー」

「わぁ！あ・・・おはよう、明人くん。」
伊奈さんが起きました。

「おはようございます。伊奈さん。」

二人は、伊奈さんに挨拶をした。

気持ちのいい朝です。

さて。ここからが問題です。

「起きろっ二人とも！」

百合花が起こしてみます！

「うー・・・ん」

「眠い・・・ぞ。」

おおーっと！二人は起きません。

「起きてよ。二人とも！」
伊奈さんがチャレンジ！

「くかー！」
「むにやむにや。」

二人はまだ起きません。

次は、明人です！
のってまいりましたあー

「ふふふ。貴方達？そろそろ起きましよう？」

おお・・・きれちゃいました。

起きなかつたら、10000パーセント死にます！

「「おはようございます！！！！明人様！！！！」」

明人勝利！

「おはよう。」

明人は普通に挨拶した。

「もうすぐレオ君来ると思っわ。」

伊奈さんがいった。

「トースト出来たよ。」

百合花が出来たてのトーストを持ってきた。

「さあ、食べましょう。」

早速伊奈さんが食べ始めた。

「あら？私の分は？」
実古が首をかしげた。

「寝坊するやつにはあげないわ。」

百合花びしつと言った。

「そんなあ~~~~百合花ちゃあん~~~~」

優がよってきました。

「いっつもづいわ。」

「ペーパー。。。。」

百合花がいつも通り蹴ろうとしたら。。。

「ペーーーーー！」

ぶしゅぶしゅー！

「わ！わ！」

ペーちゃんが水をはき、優にぶっかけました。

「あら・・・ペーちゃんもうざかった？」

「ペー。」

けっこう仲が良い百合花とペーちゃんでした。

「もう、寝坊しない？」

百合花が聞いた。

「はいい！」

「はい。」

百合花が二人にトーストを出してあげました。

「ごちそうさまー！」

もう明人と伊奈さんは食べ終わっていたとき。

+++++

「皆さん!」

レオが来た。

「あーレオ君!入って!」

出迎えたのは実古。

「あ・・・はい。」

なんとなく元気がないレオ。

「あら。レオ!」

「!伊奈さん。来てたんですか。」

「皆さん・・・少し聞いてほしいことが・・・。」

やっぱり元気がありません。

「ええっと、大王のところに行くには、地獄試練ロードを通っていく

しかないんです。」

「そうなの？」

優が聞いた。

「はい。別の道は無いです。」

「なら、まずそこに行かなくちゃね。」
百合花はメモをした。

「いつてらっしやい……。」

伊奈さんが寂しそうだ。

「あああ!!!仕事遅れちゃう!」
伊奈さんは慌てて消えていった。

「ああ!僕も!」

貴方達はなにしてるんですか。

「私達も、いこっ!」

実古は、行く気満々です。

レ
ミ
ン
ト
ー
…

第十五話 トースト（後書き）

（キャラの伝言板）

第九回 明人 + 明人インタビュー +

「よっし！ペーちゃん、よろしく！」

「ペー。」

「身長は？」

「ペペーペ（6センチ）」

「誕生日は？」

「ペー？（さあ？）」

「血液型は？」

「ペーペ（クワ型）」

「！！！！！！ 寒い！」

「でっではー！」

「ペーー」

第十六話 血の海地獄（前書き）

地獄ロード編です。

第十六話 血の海地獄

てくてく……。

四人は、地獄試練ロードを歩いていた。

「ふにゃ……。暑くなつてない？」

だれだれ状態の実古。

「本当だね。」

あんまり疲れていない明人。

「おい。あそこを見る。」

百合花が指を指した先には、

ぐっぐっ……

「バリバリ おお。血の海地獄とやらだな。ボリボリ」

優は、のんきにせんべいを食べている。

「ばちい！」

百合花がせんべいを、はじき飛ばした。

ぼろぼろぼろ。。。

「ああ〜百合花ちゃあ〜ん……。なにすんのさあ。」
せんべいを飛ばされて不機嫌の優。

『おい。そんなとこで何をやっている。』

鬼が普通に近寄ってきました。

「え？いやあ。そのお。」

実古が揺しまくっている。

『ほら。こつちだ。』

無理やり連れて行かれる四人

（あああああああ！！！！）

ずりずりずり。。。

ぼーーい。

「きゃあああああ！」

なんと実古が、血の海地獄に投げ出された。

「実古!!！」

明人が、いった瞬間……

どぼん。

「ぎゃあああ!熱い!熱い!!!!」

パニック状態です。

『次は……坊や。』

次に、優が掴まれた。

ぽーい

「優!!!!」

どぼん。

「ふぎや ああ ああ ああ ああ！」

優の音が響きわたる。

『ほね。ちつちつといくぞ。譲さん！』

「な!？」

ぽーーーーい

「うー!？うわっ」

どぼんー!

「あっっ!」

『最後は……兄さんだね。』

鬼が微笑んだ。

『ホレ。』

ぼーい

どぼん!!

「うわ!あつつい!」

みんな血の海地獄へ入らされた。

『じゃあ今から30分な。』

ぐっぐっ。。。。

(優!優!!!)

(何だ明人)

(30分我慢して、休憩のときにげよう!)

(わかった。。。。)

「あついよお〜百合花あ！」

百合花に助けを呼ぶ実古。

「我慢しなさい！」

「はっ！」

+++++

『よし。休憩だ。』

「いくぞ。みんな。」

百合花が先頭で走っていく。

だだだだだ……

そして鬼の目を盗んで……

逃げた。

「もう大丈夫だよ！」

明人が息を切らしながら皆に言った。

「おお！今分かったよう！」

実古がなにやら分かったらしい。

「みんなさあ、入り口に来たときの第一印象は？」

皆、一生懸命に考えている。

読者の皆さんは、覚えていますか？
第一話の十行目ですよ。

そう……。

<なんとなくあつかった>
です。

「暑くなかった？」

「うん！・・・」

「そうだな。」

「同感。」

「その暑さって、血の海地獄からきてたんだよう！」

実古が自信満々に言った。

「・・・。」

どうでもいいことが分かった一同でした

第十六話 血の海地獄（後書き）

（キャラの伝言板）

第十回 三人＋実古 + お祝い＋

明「わあ！十回までいったね！」

作「嬉しいかぎりだよ」

百「じゃあ、みんなで・・・」

三人「ありがとう！そしてこれからも
キャラの伝言板をよろしくね！！」

明「では。また次回」

おまけ

実古「私のコーナーにコメントがこなあい！！
くださあい！！」

第十七話 お昼

今、地獄は昼。

なんとか暑い場所から脱出した四人。

「ふう〜やつと抜け出せたねえ・・・。」

額ひたいのあせをぬぐいながら、実古がいった。

「しかしここは何も無いな。」

百合花が周りをぐるりと見渡した。

すると明人が、

「休憩しない？」

と言った。皆一生懸命に逃げたので、結構疲れている。

「いいぞ。」

優は、賛成。

+++++

四人は、適当に道の端に座った。

「お昼にしようぜい」

ノリノリに実古が誘った。

「いいわよ。」

「俺もだ。」

「お腹空いたもんね。」

早速お昼にすることにした。

++++ご飯++++

「サンドウィッチを作ったぞ。」

百合花がバスケットを取り出した。

「わあ。」

実古がサンドウィッチに手を伸ばした。

「こらっ！実古、いただきますは？」

明人がお母さんみたいです。

「いただきます」

皆サンドウィッチをほお張った。
おいしそう……。

+++++

「「ごちそうさまあ」」

みんな食べ終わりました。

「あれ？優がない。」
気がついたのは、明人。

「アホはほっとけ。」
「早くいこ」！

二人とも、優をほって行こうとします。

「待つて待つて待つて！二人ともお」！
必死に止める明人。
でも、二人は……

「はあ？」

「早くう」

待つてくれません。

「どくしたんだ？明人。」

なんと優がひょっこり現れた。

「ほら、行こう。」

優が言うと……。

「行こう。百合花、実古。」

ほっておけばよかったと思う明人でした。

「……。」

？元気がありませんよ？優。

「うっさい。」

少し元気が無いアホと四人は、次の場所に向かうのでした。

「俺だけ扱いひどっ」

第十七話 お昼（後書き）

（キャラの伝言板）

第十一回 実古 + 質問Q&A +

実「コメ来ないからやっっちゃいますう〜（怒）」

作「私に質問？いいよ。」

実「風邪ひいてたそうだけど、何してたの？」

作「必死に次のネタを考えてたりした。」

実「ネタが思いつかない時、どうするの？」

作「布団にもぐって必死に考えるか、つつい

いいヒントはないかと漫画に手を伸ばしたりしてる。」

実「だめだめじゃん……。えっと、一番嬉しいことは？」

作「コメントがきたこと！めっちゃめっちゃ嬉しい！」

実「ありがとぉ〜」

作「ばいび。」

第十八話 風邪（前書き）

おお！？いつの間に、アクセス数が、5000こえていました！！
みなさん、ありがとうございます
これからもよろしくお願いします。

第十八話 風邪

今、地獄は夜です。

「じほっじほっ！」

「あれえー？優、風邪？」

実古が心配そうに聞く。

「そうみたいだ。頭が痛い。」

優が頭を押さえながら歩く。

「さあ、いくぞ、皆。」

百合花はそんなのお構いなしで行こうとする。

「少し休んだ方がよくない？」

明人は、優のことを心配している。

「明人……。」

じーんとくる優でした

+++++

「じほっじほっ！！」

「せき酷くなつてない？」

実古が看病している。

ちなみに今、近くにあつた空き家にいる。

この辺は、空き家が多い。

「薬……無いしね。」

実古がしょぼんとした。

からから……

明人が入ってきました。

「レオく君か、伊奈さん呼べば？」

「明人！それいいね」

「俺、百合花に、頼んでくる。」

明人が部屋をでた。

++5分後++

からからから・・・

「もうすぐ来るって。」

明人が戻ってきた。

「うん！」

++さらに5分後++

「あらあら・・・優君、風邪？」

伊奈さんがやってきた。

「さあ？シラネ。」
百合花が冷たく言った。

(ががーん)

「あっはは・・・入るね。」

「ドーズ。」

からから・・・

部屋に伊奈さんが入ってきた。

「はい、薬。」

伊奈さんは、持っていた袋を実古に渡した。

「はい。優、飲んで。」

「オオウ・・・。」

ゴクゴク・・・

(にっがーい!!!!)

実は薬が苦手な優でした。

「はい、あと食材。」

伊奈さんは、明人に食材が入った袋を渡した。

「ありがとうございます！」

明人がお礼をいった。

「じゃあ、帰るわ……。」

伊奈さんが帰ろうとしたとき、

「あつよかったら、一緒にどうぞですか？」

明人が誘った。

「いいの？」

「はい!!」

「今日は、うどんの予定です。」

「あら、大好きよ。それ。」

今日のご飯は、賑やかになりそうです。

第十八話 風邪（後書き）

キャラクターの伝言板

第十二回 作者

作「ん、今回は、休ませていただきます。」
明「すみません。」

第十九話 メモリカード（前書き）

さあさあ！クイズ！！

わたしは、何歳でしょう！？

- 1 ・ 小学校五年生
- 2 ・ 中学校一年生
- 3 ・ 高校二年生
- 4 ・ 19歳

さあ、どれでしょう！？

あたった人には、小説前書きに載せさせてもらいます。

11月20日締め切り！

あと、会員カードも・・・。

その説明は、次回っ

では！どうぞ

新アイテム来る！？です。

第十九話 メモリカード

++朝++

「もうすぐ、針山地獄だつてえ」

実古が歩きながら地図を見る。
なので、たまにつまずいてしまう。

「こわあゝ・・・。」

明人がびびってる。

だから、前も言ったけど貴方は大丈夫じゃないですか？

「ふふふ・・・うるさいですよ・・・」

と明人がナレーターに言ったとたん・・・

「ぶぎゃん!!」

実古がとうとうこけてしまった。

「前をちゃんと見ないからだ。」

百合花が冷たい目でみる。

「……。」

実古が怪我をしていた。

「ああ〜！もうっ」

百合花が救急セットを取り出した。

「ほら！消毒するぞ。」

消毒液を実古にぬってあげた。

「ぎゃっ」

しみるようです。

「はい。いくぞ。」

+++++

「百合花あ〜！」

優がよってきた。

「大好き」

（いいはなつたー！）

「大嫌い」

百合花は、冷たく返した。

「あ！あれって・・・！」

明人が指差した先には・・・

「はっ針やま・・・」

針山地獄があった。するどい針が山にづめこまれている。

「とにかく行くぞ。」

百合花が進み始めた。

「まっってください。」

どこからか声がした。

「くんには。」

「レツレオくん!」「

そこにレオが現れた。

「そのままいったら、貴方達魂バラバラになって
もう生き返れなくなりますよ?」

(こええ〜〜!)

「ならどうしたらいいんだ。」

百合花がむっとする。

「はい。そのためにこれを持って来ましたよ?」

ガサガサ・・・

「はい。」

そこには、手のひらサイズぐらいのメモ리카ードがあった。

「！！なに？」

明人がびっくりしている。

「地獄で戦っていくなら、これが必要なんです。」

「ああ〜かわいい〜」

実古が遊び始めた。

「このピンクのカードは、実古さんのですよ。」

レオが実古に差し出した。

「わあ〜か・わ・い・い！！！！」

「でも、こつねってどう使っんです？」

明人が、メモ리카ードを指差した。

「ああ・・・これは・・・。」

第十九話 メモリカード（後書き）

〈キャラの伝言板〉

第十三話 実古 + 質問Q&A +

実「今回は、明人にしつつもーん」

明「実古、楽しそうだね。」

実「あはははは！明人って、学年順位何位？」

明「何でそんなこと！！！」

実「さあ、何位？」

明「156人中、149位……。」

実「馬鹿なんだ。」

明「うるさあい！」

実「じゃあね。」

明「変なことだけ聞くなあ〜〜！」

第二十話 使い方 (前書き)

おお！？なんとなんと、二十話更新&文字数がトップに！！
みなさん、いつもありがとうございます。

明人「ありがとう」

第二十話 使い方

「これは……。」

「ええっと、もこちゃん、武器かして。」

「実古ですう〜。」

実古がぶくーっと膨れた。

「知ってます。」

さらっとボケるレオ君でした。

「はい。木の棒。」

実古は、すねている。

なぜかって？もこちゃんと呼ばれたことと、木の棒が武器ってことです。

「ええっと、このメモリカードを……っと」

カチッ

レオは木の棒の先にメモリカードを差し込んだ。

そのとき！

ちやらららら・・・

木の棒の両端から鎖が出てきた。
その先には、鉄球がついていた。

「なにこれえー!?!」

一番喜んだのは、実古です。
木の棒が武器じゃなかったからですな。

「おお! すっごいじゃん。」

明人もビツクリしている。

「はい、優さんは緑色の。」

レオが差し出した。

「おう・・・」

(ヤリってどう变形するんだ?)

カチッ

ばああ!

ヤリが伸びた。

「……………」

優は少しがっかりしました。

(もっとかっこよい物にならんかい!)

「はい。百合花さん。」

百合花には、黄色のカードだ。

「……………。ペーちゃんをどーすんのぞ。」

百合花がレオを睨んだ。

「まあ……………やってみてください。」

「どじやって?」

ぱくっ

ペーちゃんがメモリカードをくわえた。

しーん

「なにもおこらんぞ?」

優が、ぽつりと言う。

「映像を見れるようになったよん。」

レオがにこっという。

(それだけええー！?)

「はい・・・明人君。」

明人は、金色のカードだ。

「あつ明人くんは、本当に危険なときにだけつかってください。」

レオが慌てていう。

混乱中。

「普段は、ケースにしまつてあるから大丈夫なんだ！」

「あ……明人君……」

（やっぱりあの人に頼むしかないのかなあ？）

「ねえ、皆さん少し席をはずしてくれないかなあ？」
レオがいった。

「明人君、少し話が……」

第二十話 使い方（後書き）

「キャラの伝言板」

第十四話 作者の一言。

作「なんか、新コーナーです。」

明「ははっ」

作「わたしは、明人が一番すきい」

明「なな!？」

作「きれた時と、普段のギャップがたまんない!」

明「ええ〜?」

作「じゃあね」

明「ふふふ。では、また次回。」

作（きれモード初登場!？）

第二十一話 キレバージョン！？（前書き）

クローバーの自己紹介の欄、見てますかあ？
あそこは約一週間ごとに変わるんです。

私の年当てクイズのヒントもあり・・・？

第二十一話 キレバージョン！？

「ちょっと話が……。」

レオが真剣な顔で明人に話しかける。

「なに？レオ君。」

「メモリカードを貸してくれない？あと、小さい剣も。」

レオが手をだす。

「いいよ。」

カチッ

「あれ……使ったらいけないんじゃない……。」

ぱたっ……

明人がいきなり倒れた。

「明人・・・君？」

(ここまでひどいとは・・・)

「明人くん？おおーい・・・。」

恐る恐る話しかける。

ぱちい！！

明人が目を覚ました。

「明人くん！」

レオが近寄る。

「？僕は貴方にキレましたか？」

(！！明人キレバージョン?)

明人は戸惑っている様子。

「あつ明人さん、そのことで話があつて。」

「そうですねか……。」

+++++

「ええつとまず、今の明人さんの感情と^{キレバージョン}普通の明人さんの感情を、わけて考えてください。」

レオが話し出す。

「ほお……。」

「いつもは、明人さんがキレると、キレバージョンが発動します。」

「・・・そうですね。」

「でも、僕が入れたメモリカードは、使い手の能力をあげるものなんです。」

「それで、能力UPキレバージョンなんですよ。」

レオが次々と説明していく。

明人はそれをまじめに聞いています。

「今の明人さんの能力だと、キレバージョンと差がすごく出てくるんです。なので普通の明人さんの感情がキレバージョンの感情と入れ替わるんですよ。」

話がおわった様子です。

「ふふふ。面白いですよ。」

楽しんでる(？)明人。

ん・・・順位149位なのに、分かるんですかね？

こんな長い話。

「頭の能力もあがってるんです。」

説明ありがとう、レオ君。

「あつあと、普通のキレバージョンは、ほとんどが
明人の意思で動いているので、能力は今ほどではありません。」

つけたしですね。

かちゃ……

レオがメモリカードを抜いた。

「んん？れ……レオ君、話って何？」

普段の明人です。

「もう終わりました。」

「えっいつおわたのおおおおお！？」

第二十一話 キレバージョン!? (後書き)

くキャラの伝言板く

第十五話 実古の独り言

実「ちょっとおく今回は、レオ君と明人しか出てないじゃないのっ」
作「うん。悪い?」

実「・・・もお。最近、冷たい。」

作「そんなことないっちゃ。」

実「何!? ちゃって!!!?」

作「あらら。もうバイバイじゃ。」

実「うつそん! まだ何も言っただい・・・」

作「バイバイ」

実「うぎゃん!!」

第二十二話 じゃんけんの

「いくか？」

いきなりドアップの優君。

「……だな。」

腕を組みながら仁王立ちの百合花。

「針山地獄——！！」

大声で明人が叫んだあと……

「レツツゴォ」

いざー！のりこみ針山地獄——！！

……初めからテンション高いです。

+++++

てくてくてく・・・うっ

実古がつまづきました。
ださいです。

「いいよいよ針山地獄だね!!」

つまづいた照れ隠しにあわてていう。

「・・・一体なにがあるんだ？」
百合花の表情がくもる。
実際実古以外不安そうな顔をしている。
レオにも注意を受けるほどの地獄・・・
それが目の前にあるのだから。

「・・・？門があるよ？」

明人が門に手をおく。
ものすごくでかい門だ。
明人の身長約3倍はある。

「あかないわ。」
百合花が押してみた。

「ノックすればいいんじゃない？」
明人が笑顔でいう。

「はあああ！！？」

なんともホノボノした考えでビツクリする一同。

こんこん・・・

(もうやってるうー！！？)()

『はいなの』

門の向こうからかわいらしい声がした。

「中に入りたんだけど・・・」
明人が会話を始める。

『わかったなの 少し待つの』

きゅきゅきゅいいいいいいいいいい・・・

門が一気に開いた。

『よつこそなの』

そこには小学校四年生ぐらいの女の子が立っていた。

「……」

優が固まる。子供は苦手のようだ。

『早速じゃんけんをするの』

「あ……うん。」

「じゃんけん……」

「「ぼい!!!」」

「私と明人がパーで実古と優がグーね？」

『勝ち組はこっちくるの 負け組みはあっちの
門から入るの』

もう一つの小さな門を指差した。

「またあとでねえ」

実古がのんきに手を振っている。

|||| 針山地獄戦闘^{バトル}スタート!! |||

第二十二話 じゃんけんの (後書き)

「キャラの伝言板」

番外編

作「ななななんと！地獄 アドベンチャーの
公式ブログスタート」

明「二十話突破記念だよ！」

作「一度きてみてちよ。次回予告など

新着情報満点」

明「じゃーね！」

第二十三話 激しい戦い始まる！（前書き）

私の年を発表

なんとなんと中一です。

正解者

夜奈さん

正解者には、会員ナンバープレゼント！

夜奈さん ナンバー001 ポイント10

コメントをくれたら、ポイントあげます

第二十三話 激しい戦い始まる！

ウイイイイン。

今、明人と百合花と女の子とでエレベーターに乗っています。

「あと少しなの」

「ねえ、名前なんて言うの？」

明人が少女の目の高さに腰をおろした。

「リユナなの 鬼ランクCなの」

リユナは、なぜかご機嫌です。

「なにそんなにうきうきしているんだ。」

百合花がリユナを見下ろす。

「だって、ひさびさに戦えるなの 嬉しいなの」

「戦うってどついでとー!？」

百合花がカツとなる。予想もしていなかった言葉に明人は固まる。

「針山地獄は、大罪を犯した者が来るところなのだから、バトルって言うよりお仕置きなの」

「……………」

チン

「オクジヨウデゴザイマス」

エレベーターを降りたら、そこには広い草原みたいなものが広がっていた。

「さあ、位置につくの」

「あ……分かった。」
「なにが始まるんだ？」

++++

「バトル始めるの 制限時間一時間なの」

「デハ、ハジメマス。」

「バトル、ゝゝ」

「スタート！」

「行かせてもらうなの」

リユナが地をけた。

ピョーーーン！

「！..！」

「まるで子猫だ。」

と、百合花が言った瞬間・・・

すつ

リユナが百合花の頭の上にとつた。

「あれれ？攻撃してこないなの？」

「！！明人、剣を抜け！」

「ええ！無理無理無理。怖い……。」

明人が必死に首を振る。

「あああ……ペーちゃん、行くよ。」

「ペーペー。」

ペーちゃんがメモ리카ードをくわえた。

かちっ！

「ドーするんだ？」

百合花が首をかしげている。

その後ろで、

「無理無理無理無理……」
明人がまだ言っていた。

「ドーしたなの？攻撃しないなの？」

「ペっペーちゃん！水はいてー！！」

「ペーペー。」

ぶしゃああああああ！

威力が前より上がっていた。メモ리카ードのおかげだろう。

「にこにこ！？」

リユナにヒットする。

シヤッ

なんとリユナが水の中から出てきた。

「よわいなの！」

リユナもメモ리카ードを出す。
そして、持っていた銃にはめる。

カチッ

「無理無理無理無理・・・」

「その鳥、まだまだ力出せるなの。」

ちやつ・・・

銃を百合花に向ける。

「くっ・・・」

百合花が唇をかむ。

ずがああん！！

「ぐわっ！！」

「もう終わりなの？」

百合花がふらふらしながらリユナを睨む。

（さっきの弾は・・・水の圧縮砲？）

肩から血がにじむ。心臓に当たったら確実に死ぬ。

「はあく次で終わりなの？」

ちやつ・・・

「!?!」

ずがああああん！

百合花が少しよけたので、心臓には当たらなかった。

「・・・」

ひどく出血です。

ばた・・・

百合花がとうとう倒れてしまいました。

第二十三話 激しい戦い始まる！（後書き）

くキャラの伝言板く

番外編

作「あゝ地獄 アドベンチャーくミンナの部屋く
もいよいよオープンしたね！」

明「うん。」

百「だが、もう一つ作りたい。」

作「なんで？」

百「こんどは、投票などできるブログがいい。」

作「・・・できたら、おしえるわ。」

実「よおっし！頑張る！」

第二十四話 決着つく！（前書き）

とうとう針山地獄編も、終わり！！

第二十四話 決着つく!

+++実古・優方面+++

「よし!このドアを開ければいいんだねえ?」

実古ドアノブをつかむ。

「いくぞ!」

アホでたらしの優は待ちきれない様子。

「説明ひどくねーか?」

がちゅっ

「たーのもー」

ドアを開けた先には、黒人のような肌のいろをした鬼の男がいた。
20歳ぐらいだろう。

『なっ!?!ここは道場ではないっ!?!』

いきなりあわてる鬼。

「いーじゃん。」

『いって・・・!?!?』

そんな二人をよそにのんびり欠伸をする優。

『ふん。俺はヨウ、鬼ランクEだ。』

自己紹介を始めた。

「さつさとはじめようよあ〜」
結構ひどい実古。

『そういえば、いまごろリユナちゃんも戦ってるかなあ〜？
カワイイよなあ、リユナちゃんは。たまんない。
いっつも俺のことお兄たまあ〜って……………』

「変態か？あいつ」「(ヒンヒン)
「そうだよ〜」「(ヒンヒン)」

『いっつも一緒にいる甲斐あるよな〜本当……………』

カチツ・・・

『それでそれで・・・』

ぽこおっ！……！！……！！……！！

実古がうざくなつてとうとう木の棒の先についてる鉄球でなぐつてやりました。

『ほげええ〜・・・』

ばたり。

「よわッ」

実古が軽く蹴りました。

「明人・・・。」

優は遠くをみつめた。

+++ 明人 & 百合花 方面 +++

「……………」

三人の間で沈黙が訪れる。

「百合花っ百合花……………」

明人が真っ青になって百合花をゆする。

「そこのお兄さんは、攻撃してこないなの？」

(レオくんあまり使わないでって言われてけど……………)

カチッ

メモリカードをさした。

「……………」

明人はゆっくり目を開けた。

「久しぶりですねえ。戦えるの。」

明人がうつすら笑った。

「に!?!?なんかなんかかわった!?!?!?」
とまどうリユナ。

「・・・何かわかんないけど撃つなの!!」

ずがん!ずがん!!

けれども明人は弾を素早くよけた。

「む!なの。」

ずがん!!!!

「ふふ。こんなものですか?鬼ランクCの力は。」

からかう明人。

「・・・まずこの女にとどめを刺すなの。」

ちやっ

リユナは百合花に銃を向けた。

「っ!?!?」

「3

「2

「1

げしっ

なんとか明人がリユナを蹴飛ばした。

「なにに？邪魔するなの！！！」

「ふふ・・・卑怯な真似をしてくれましたね？」

明人が剣を抜いた。

「では。」

目にもとまらない速さでリユナに近寄って・・・

ぐわっ・・・

刺した。

「~~~~~!!!」

リュナの魂が碎けた。

第二十四話 決着つく！（後書き）

（キャラの伝言板）

第十六話

作「ちよわつす。今からここだけの話をするよん。」

明「なにになに！！？」

作「実は、地獄 アドベンチャーは、10話程度で
終わらすつもりだったんです。」

明「えええ！！！！？」

作「しかも、恋愛話を書くつもりで……。」

明「やめてやめて……！！」

作「しかも明人の初回設定が、もっと男らしかった
はず……！！」

明「もうやめてええ！！」

作「じゃあねん」

明（終わった……）

作「ほら、明人。もつとあるよ、裏話。」

明「もういややああああ」

第二十五話 鍋の時期ですなあゝ b y 優 (前書き)

こんにちは、クローバー です。

なんと、読者の皆様に地獄 アドベンチャーで

出してほしいキャラクターを募集します。

名前、特徴、年をかいてください

グランプリ・準グランプリ・入選

です。よろしくおねがいます！

第二十五話 鍋の時期ですなあ〜 b y 優

カチツ・・・。

明人がメモリカードを抜いた。

「・・・？あれ！？リユナがいない？」

あたりを見回す明人。

・・・と明人の右下に百合花が横たわっていた。

「わわ！大変だああ！！とりあえず下におりよお・・・。」

明人は百合花を背負って、屋上をでた。

+++++

ウイイイイイン・・・

「すまん・・・明人・・・。」

百合花がかすかに喋った。

「いいよ。気にしなくて。」

ウイイイイイ・・・

「でもさ、俺百合花の事よく分からないんだ。
明人が少し下を向いた。」

「・・・え？」

「だって、いつでも話し方や笑っているときも、
どこか冷めてていつも何かを願っている風に見えるんだ。」

「・・・。」

「百合花は、何を願っているの？」

一瞬百合花の瞳がゆれた。

(明人・・・!!)

「私は……。」

チン

「イツカイニツキマシタ。」

「おっと……でよう。」

「あっ！明人お」

外には実古と優が待っていた。
というより、優は寝ていた。

「あっ！百合花怪我してるんだ。急いで空き家さがそう……！」

「うっうん……！」

+++++

適当に空き家を見つけ、中に入った明人達は早速伊奈さんとレオ君を呼んだ。

「わぁ……百合花ちゃん、大丈夫？
今から治療するね。」

伊奈さんが百合花のそばに寄った。

そして百合花の額にふれて……
ぱぁぁ！

百合花が光った。

が、百合花はいつこうに良くなる。

「……大怪我だから鬼ランクBじゃ駄目みたい。」

伊奈がうつむいた。

「なら、僕がやりますよ。」

レオがたった。

「まってください！レオ君は鬼じゃないんじゃないんじゃ……。」

明人が心配する。

「大丈夫だよ。天界、地獄界で働いている人はみんな力が使えるんだ。」

レオが百合花の額に触れた。

ぱああああああ！！！！

「すう……。」

百合花は落ち着いた様子で眠った。

「よかった……。」

実古がへろへろと床に膝を着く。

「よし！愛する百合花のためにナベでもするかあ！」

優が立ち上がった。

「そう？なら私食材買ってくる」

「伊奈さんいつてらっしやあ〜い」

実古がくるっと明人の方をみて・・・

「明人は野菜切つてね」

「無理無理無理無理無理・・・。」

優も・・・

「豆腐でも切ってもらおうかな？」

「無〜〜理〜〜！〜！！〜！！〜！！」

第二十五話 鍋の時期ですなあ〜 b y 優（後書き）

〜キャラの伝言版〜

第十七回

作「やあやあ、裏話第二回ですよ」

百「今回は私も来たんだ」

作「ええ〜つとね、伊奈さんは、夜奈さんの

かわいい鬼を作ってほしいという希望をもとに作られたんだよ。」

百「ほお・・・。」

作「おわり!!」

百「おわり!!!?!?」

第二十六話 商店街（前書き）

こんにちは クローバー です。

前回地獄 アドベンチャーのブログをつくりました。

け・ど！！それだけじゃ収まりきらなくて、

今度は、「+++クローバー」の部屋+++」

としました！特別番外編なども書くつもりです。

あと、来てくれた人と、リレー小説なんか・・・

まあ、来て見て下さい <http://gray.ap.teacu>

p.com/misa/

です。ちょいおしゃれなブログです

第二十六話 商店街

地獄は朝。

激しい戦いの後、少し休暇をとり百合花の体調も復活した。

「みてみてえ！何か賑やかだあ」

実古が飛び跳ねる。

「・・・地獄商店街??」

優は首をかしげた。

よくみると、そこにいるのは人《魂》ではなく鬼だった。

「わあ！鬼さんがいっぱい」

「わあ！じゃないよ実古！！鬼だぞ？鬼！！危険だって！！
明人が必死に叫ぶ。」

「その心配はないわ。」

どこからか声がした。
すると、

「よっ伊奈でっす!!」

「伊奈さん!!!!」

「心配はいらないうつて、どういふことですか?」

百合花がきく。

「みんな、今の大王の考えには不安をもってるの。もちろん反対の人も多いわ。けど、大王よ?さからったら魂こなごなよ!!だから、あなたたちは勇者つばい存在なの。」

「へえへえ」

分かっているのか分かってないのか実古がうなづく。

「あと、今大王とともに仕切っているのが、鬼ランクAで地獄でも大王の次に権力がある三人よ。」

「・・・なら」

明人の目が光る。

「買い物できるんだね」

ぴゅぷゅぷゅぷゅぷゅぷゅぷゅぷゅぷゅ!!!!

明人はものすごい速さで商店街に向かっていった。

「明人・・・買い物好きなんだ・・・。」

優が遠くに見える明人の姿を見つめていた。

+++++

明人方面***

「わー！たくさん店がある」

うきうきの明人。

だが、

「・・・なんか懐かしいなあ人間界が。」

目を細めて空を見つめる明人。

そうやってボーっとしていると、

「わっあの人って、今地獄をめぐってる!?!」

「すごい!」

「勇者??」

鬼がたくさん寄ってきた。

「わっわっわっ!」

「ねえ!どこいきたい?」

「俺達おごるよ!」

「勇者だもん」

ぐうづづうううう・・・

「あ。」

明人のお腹の虫がなった。
元気よく。

「あのおくお腹すきました。」

「あっはははははは!」

「すげー勇者カワイイ!」

「ほんとだ!!かわいい。」

「ははっ」

さっきまで深刻な顔をしていた明人がわらった。

笑い声は空高く響きわたった。

第二十六話 商店街（後書き）

（キャラの伝言板）

第十八回

作「みかんたべたい。」

明「そういうことは、作者自己紹介の欄でいってくださいよお〜。」

作「そうする。」

百「やっとブログできたのか。」

悪「そうですよ。ってなに？ 悪 って!?!?」

明「へ？ミスでしょ??？」

欲「なに？わたしは欲のかたまりだって!?!?」

百「誰もそんなことは言っていない。」

最悪「まあおお!?!ばいばい!?!」

第二十七話 喧嘩（前書き）

こんにちは。しばらく更新しなくってすみません！
いろいろしてて、、私だって中学生！！

青春を楽しみたいですよお
百合花「嘘つけ。」

第二十七話 喧嘩

夕方――

鬼たちに散々ごちそうしてもらった明人は、空き屋へ戻ることにした。

「ただいまあー」
勢いよくドアをあけた明人。

「もお！先いつちやってえ。」

実古がほっぺたを膨らまして玄関にきた。
奥からは、カレーライスのいい香りがただよっています。

「今日はカレーなんだよ」

にっこり笑った実古は奥へと入っていった。

+++++

カレーをたらふく食べた一同。

優はお腹いっぱいまで和室で寝ている。

「もつっだからお前は邪魔なんだ!！」

「お前じゃないよお!!!実古だよ!!!!」

「お前で上等だ!！」

キッチンの方からどなり声が聞こえてくる。
あわててキッチンへ明人がむかう。

「「っーん」」

そこにはおたがい背中を向けている百合花と実古がいた。
明人は冷蔵庫の影に隠れて様子を見てみることにした。

「なんでいつつも百合花は私のことをきらつのお!?!？」

確かに始めに会ったときから仲良くはない。

そのとき百合花の目がかすかに揺らいだ。

「……実古が悪いんだ……。」

百合花は目を実古からそらしながらいった。

「悪い……?？」

実古が聞き返す。

「あの時は親友だったのに!!!!!!」

だっ

百合花が叫んだ後リビングに向かって走り出した。

涙をぬぐいながら……

「ま……さ……か。」

実古がその場に崩れるように座り込んだ。

「あああああああ!!!!!!」

実古の泣き声が響き渡る。

「実古!?!?どういうこと!?!?」
明人が実古の近くに寄った。

「私は……とんでもない事を……」
興奮状態に陥っている。

「おちついて？話してよ……。」

「中学……一年の春……」

実古ははなしだした。

++ 中学一年の春、百合花と実古は親友でした。けど、私はいじめにあっついて

いつも百合花に助けられていました。そのおかげか夏にはいじめもやわらいで

いきました。++

「いじめ？」

「うん……」

++ けど、百合花のお父さんの都合で秋に百合花は引っ越してしまいました。

百合花が引っ越したとたんやわらいだいいじめがさらにひどくなってただ一つの百合花との通信手段の携帯を壊され、百合花とも通信できなくなり
ました。++

「電話は？」

「私の家に電話がなかったんです。結構貧乏で」

+ + そのうちいじめもひどくなっていったとき、地獄に来てしまっ
たんです。

百合花の名前を聞いた、まさか・・・とは思ったんですが、
あってみて、百合花の目は冷めていて話しかたも顔つきもちがって
いたから

別人と思うことにしたんです。 +

「でも・・・今思えば百合花が冷めてしまったのは私のせい
だったんだよね・・・ろくに連絡もとらなくて・・・。」

「大丈夫！今から百合花に説明すれば・・・。」

「無理！私はひどいことをしてしまったの！無理！！」

「実古・・・。」

第二十七話 喧嘩（後書き）

（キャラの伝言板）

作者「スミマセンお休みです。」
優「夜逃げでもする気か？」

第二十八話 仲直り（前書き）

クローバー 復活!!!

長い間ほったらかしですみませんでした（泣）

第二十八話 仲直り

「……………」

百合花はベランダに出ていた。
冷たい風が頬をすべる。

(早く……人間界に帰りたいよ……)

ガタツ!!!

「おお〜!百合花ちゃんそんなトコロにいたの?」
優がからかうようにベランダへ出てきた。
もちろん百合花はそんな優をにらみつける。

「……なんだ。」

「H A H A H A!優サマは、百合花ととうげざあーしたかったただけだよ。」

「……………」(冷たい目)

二人の間に沈黙が訪れる。

すると優は、「ふう。」と一息ついて口をひらいた。

「だからな、ちゃんと実古に思っている事言えばいいんだよ。」

「アンタ・・・知ってたの？寝てたんじゃない？」

優は「ひっひい〜」とピースをして部屋へ入っていった。

「実古・・・実古・・・。」

明人が実古を揺らす。

実古は床に張り付いたまま離れない。

「実古〜」

明人はちよつと考えて、

「朝ごはん抜き。」

「ソレはやだよお。」

一発でおきた。

朝ごはん強っ！

「・・・実古。」

百合花がキッチンへ来た。

明人は百合花が来たのをみてリビングへ戻った。

「あう……百合花。」

「……。」

「ごめん！私が実古を守らなきゃいけなかったのに……！」

「……え？」

キョトンとする実古。

「ごめん。」

「私こそ百合花の事を……分からなくて。実古が立ち上がった。」

「あの頃とはぜんぜん違ってるもん……。」

「ごめん。」

二人は仲直り出来たとさ。

その頃

「ねえ優。」

「なんだ明人。」

すると明人は外を指差して、

「あの人だれ？」

そこには窓へばり付いている女の人がいましたとさ。

第二十八話 仲直り（後書き）

〈キャラの伝言板〉

作者「さあ、今から出して欲しいキャラを募集するよお！」

明人「準レギュラー的な人が欲しいです。」

百合花「伊奈さんとレオくんは結構助かっています。」

優「俺レギュラーv」

作者「.....」

第二十九話 変な女の人が窓にいました。

さあ大変。窓に変な人がへばり付いています。

「明人、見ちゃ駄目。ああいう大人になるんじゃないよ。」

優はぼんぼんと明人の方をたたきながら
まじめにいつてみた。

「分かった、ちゃんとした大人になる。」

ちよつと乗つてみた明人。

しかし今にも大爆笑しそうで口を手でおさえています。

「明人、あつちいつてな。」

「はあい。」

すると優が変な女の人のところまで行つて、

「消える。」

といつて女の人をブランダの窓からはがして
そこらへんに転がしました。

「ゆゆゆ優！？ソレはちよつと・・・」

「一応女の人だし・・・。」

すると、

「い・ち・お・うとうとうううくく!!?」

むっくり女の人站了起来。

それにびびった明人は、

「わあ……き……綺麗な女の人だねええ……。」

声が震えていますよ？

「え、マジ?!? 私綺麗???」

「明人、嘘つかなくてでいいぞ。」

「はあ？ぎげんな優。」

「え……?」

驚く優と明人。

「なんで……名前?」

優が女から一歩さがった。

「だって私鬼だもん。君達で遊びに来た。」

（刺客！！）

「でも今からじゃあないよ。明日のおたのしみ！」

すると優の顔つきが変わり、

「おい！俺達で遊ぶってどっしりいってだよ！！」

「じゃあね」

しゅん……

「っ……あいつー」

がん！！

優が手すりを殴る。

「あんれえ〜？優、明人、どうしたの？そんなところで」

すると明人が

「さつきね・・・」

「明人！！！！」

一瞬優の顔つきがまた変わり、すぐにもどった。

「向こうでトランプしようぜ。」

「あ・・・うん・・・。」

*****寝室*****

「明人、さつきは怒鳴って悪かったな。」

「ううん・・・どうしたの？」

優はすると、

「俺の・・・勘だがな、あいつすくくつよいぞ。」

「！！！！？」

「あんなやつに、百合花と実古を合わせられるわけがない。」

「..?」

「百合花と実古をここから遠ざける!」

第二十九話 変な女の人窓にいました。(後書き)

「キャラの伝言板」

優「伊奈さんってさ、瑠紀さんが考えてたんだってな。」

作者。「うん！そんな感じ。」

伊奈「瑠紀さんありがとう」

作者「伊奈がいなかったら、どうなってたか……。」

明人「うんうん。」

作者「じゃあね！」

第三十話 キュウ

「遠さげるって、俺らだけじゃあ無理だよ！」
かすかに震えながら優にすぎる明人。その姿は、切れた明人とは
ほど遠かった。

「む……。」
だまりこむ優。

「……みんなで立ち向かおうか。」

「そうだよ。確かに百合花達を危険にさせたくないなら遠
さげるのが一番だけど、ヤッパリみんなでやれるだけやって、
それでもだめならもっと頑張ればいいんだよ。」

にっこりしながら優に話しかける明人。

「そうだな。」

そしてこの事を百合花らに話した。

朝。

その日はなんとなく薄暗く、今にも雨がふりそうだった。
皆が寝ている間、昨日の女の人が家にはいつてきた。

「ねてるう〜。やっぱりこのくら、二十歳いってないねえ。」

そして、女のひとは明人らを移動させた。

今回の戦いとなる場へ。

「う……。う。」

始めに起きたのは、百合花だった。

百合花は、あたりをきよるきよる見渡して、状況を判断するとすぐに皆をおこした。

皆が完全に目を覚ました時には女は土で遊んでいた。

（ ）（ ）（ ）この人にながあつた!?!?（ ）（ ）

すると女は、口を開いた。

「起きるのおそいよ。私は、キュウ。」

「いわゆる……。大王ってやつ?」

.....

沈黙が訪れた。

明人は頭の中がぐるぐるしていた。

(大王って男でしょう？レオくん！?!?.....ん？
でもレオ君は、お兄ちゃんとは違ってなかった.....)

「あはは〜 大王が女ってことは、上層部のものしか
知らないんだよ？」 キュウはニツコリしながら言った。

「今から、ゲームしようか？」
キュウは歩き出した。

「四対一で、貴方達が勝ったらこの適当に地獄へ落としていた人を
元に戻し、落とすのもやめる」

「ルールは簡単。」

「相手が倒れるまでたたかう」

「ええ!!!?」

明人が一番ビツクリしていた。

「スタート。」

第三十話 キュウ（後書き）

「キャラの伝言板」

明人「あ……。」

作者「なに？」

明人「いや……この流れ、もうすぐ最終回じゃん!!」

作者「本当だア」

明人「いやいやいや!待ってエエ!」

第三十一話 激しい戦い再び

「スズす巢酢スタートしちやたたよお!!!」

・・・明人、馬鹿そうですよ??

「わつたしから行くねえ」

実古が走り出した。

なぜか今から遊びに行く的な足取りでキュウのところに行く実古。

「おお、実古ちゃんから?お姉さん怖いよおく?」

すると実古の顔つきが変わり、

「あはは、お姉さんって年かなあ?」

「許さないからね?お姉さん・・・。」

実古は木の棒にメモリーカードを入れてすばやく走りだした。

鉄球がキュウに当たったかと思うとすでにそこにはキュウはいなくて、実古の背後にいた。

「言ったでしょ？お姉さん、怖いって」

キユウはバズーカで実古の腹部を撃った。

「かはっ……」

「実古！……！」

実古はその場に崩れおちた。

すばやく百合花は実古を抱き上げ、明人達のもとに戻った。

「次は、私が行くわ。」

百合花が立ち上がった。

「えええ。俺が行く！俺が！」

「明人、強い人はね……最後の切り札なんだよ？」

だっ……

優がたちあがった。

「俺もいくぞあ、百合花。一気にフルボッコだあ。」

「次は、二人でかぁ……あら？明人君は最後なの？
一番弱そうなのに……。」

キュウはからかうように喋る。

百合花がペーちゃんの水はきでキュウの目をくらましている間に
優が後ろにまわり込み、槍でついた。
槍はキュウの頬をかすめた。

「次は私の番だよ？」

キュウはバースーカを優に向けて、引き金を引きかけた……が、
百合花の強烈な蹴りによって、キュウごと吹き飛ばした。

「ああ……。」

その間に優が槍を……と思った瞬間キュウは優の槍をつかみ、
優に向けて刺した。

「痛つてえ！」

次に百合花も肩を刺された。
キュウにはあまり無駄な動きがない。

「うぐ！」百合花は気をうしなつた。

すると優は、百合花を明人の方に突き飛ばした。

「百合花は、アウトだから相手は俺だぜ？オバサン」

第三十一話 激しい戦い再び（後書き）

（キャラの伝言板）

実古「私出番あれだけ？」

百合花「かわいそうに……。」「（ぷっ）

実古「百合花あ??！」

第三十二話 怒り

「百合花は、アウトだから相手は俺だぜ？オバサン」

「オバサンじゃあないわよ！まだ26よ！？」

そういつてオバサ・・・キユウは優に向かってバズーカを向けた。

「何て呼べばいいのさ？」

するとキユウは「うん」と少しうなづいてから、

「もち、お姉さん」

とだけ言つて優にバズーカを向けなおした。

その頃にはもう遅く、優はキユウの後ろに回り込んで左の肩をさした。

「んじゃー、サヨナラお姉さん・・・。」

キユウはその場に倒れた。

「勝つた？」

明人が目を輝かせながらいう。

誰もが終わったと思つた瞬間、キユウは起き上がり優にバズーカをうった。

ばあああん！！！！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「優！！！！」

「ずるいよ！倒れたら負けって言ったじゃん！」
明人は、震える体を必死に押さえながらキュウにはなす。

「倒れたんじゃアないよ？」

「自分からたおれたのさ。」

明人は声もでなかった。

恐怖。
怒り。

「さあ来な、明人君」

(これが大王・・・酷すぎる。)

明人はヨロヨロ立ち上がり、大王の前に立った。
足がガクガクふるえて、今にもなきそうだ。

「あう・・・。」

「・・・やっぱり剣使わなくちゃいけないのかな？」

じっと剣を見つめる明人。

だが、明人は剣を抜かず、その場で・・・

「手加減してください。」

命乞いをした・・・。

ダサすぎる。主人公これから百合花になりますよ？
百合花人気だし・・・。

でも、キュウはあっさり

「いいよ」

と言っていた。

そしてキュウが明人に向けてバズーカを撃った。

「わあああああああ！！」

「ずがん！ずがん！ずがん！」

すばしっこく逃げる明人は、なかなか当たらなかった。

「ハエですか！？」

キュウがまた一発撃った。

その瞬間明人は、一瞬逃げ遅れた。

(当たる。)

目をきゅっと瞑った。

・・・が、明人には一向に痛みが来ない。
そおっと目を開けると、

「百合花！」

ペーちゃんを使って、シールドをだす百合花の姿があった。

「私、守備のが得意みたいだ。」

第三十二話 怒り（後書き）

「キャラの伝言板」

明人「そついえば、作者も刃物恐怖症なんだってね！」

作者「おう。」

百合花「明人お！クローバー！野菜きつてくれないかあ！？」

作&明「無理無理無理……。」

第三十三話 決心

「私……守備の方が得意みたいだ。」

「ゆっ……百合花!!!」

ふらふら明人が立ち上がる。

すると、百合花の方は、その場に座り込んだ。

「頑張れ、明人。」

ぼそつと明人に言った。百合花は気力の限界が近づいているようだ。

「そんなぁ……無理だよ、俺じゃぁ……。こわいし……。」

明人が目に涙を溜めながら百合花とはなす。

「明人……お前ならいけるだろ？信じてるからな。」

とだけいつて百合花はふらふらと優の方へ行つた。

「……あう。」

キュウがバンバン撃つてきた。

弾の雨のようだ。

明人は、それを必死によけた。

明人は何かを決心したかのように

「いくぞ！」

明人は、キュウを睨みつけた。

だだだだっ！

キュウの近くまでよって、素早くみぞおちをグーで殴った。

「ぐう……。」

バランスを崩したキュウを明人は、上から蹴った。

「あっ……！！！」

倒れかけたが、体制をなおし明人の胸倉をつかんだ。

「調子にのっちゃあ駄目だよ？明人君……。」

どおおおおおおおん！

明人を壁に叩き付けた。

「っ！！！」

よろよろと壁で体を支えながらも明人は立っていた。

「元気ねえ？若いから……！！！」

「っ……！！あっ……！」

いきなり明人が苦しみ出したのでキュウはビックリしているようだ。

「くっ……はあはあはあ……。」

がくっ！！

明人は一瞬気を失ったが、途中で立ち上がった。

剣を強く握って。

「ははは、久しぶりですね、戦いなんて。」

明人はメモリカードを剣に差し込んでいた。

第三十三話 決心（後書き）

（キャラの伝言板）

作者「キレバージョン明人来たネ！」

キレ明人「ははは、頑張りますよ。」

百合花（またキレてる・・・。）

キレ明人「百合花、こんにちは。」

百合花「こんにちは。あつと、地獄観視室で助けてくれてありがとう。
な。」

キレ明人「イエイエ。」

作者「ではでは、次回で。」

第三十四話 最後！

「ええっと・・・オバサン、お相手よろしくお願いしますね？」
うっすらと笑みを浮かべた明人は片手に剣をにぎっている。
いっぽうキュウは、

「！？なんか風陰気がわった・・・ていうか、またオバサンって！」

少し驚いた様子でもどこか楽しそうなキュウ。
またバースト力を構えて、引き金をひいた。

かちっ・・・かちっ・・・。

「はは、弾切れですか？」

明人はキュウに向けて、切りかかった。

・・・が、キュウは持っていた予備の銃で、剣を止めた。

「強くなってるなあ、明人くん。」

実古と優は、少し意識があつた。

(明人お・・・。)

実古は、祈るように空を見つめていた。

優はずっと明人とキュウの戦いをみている。

「なぜキュウは無差別に人を地獄に落とすのですか？」

明人が問いかける。

「きまつてるじゃん 楽しいからよ。」

(楽しい!?)

明人の目が、カツと見開かれた。

明人はキュウの腹部を狙って、切りかかった。

・・・が、キュウが少しよけた事により、かすれる程度のダメージだった。

キュウも負けじと明人に銃をむける。

ばん!ばん!ばん!

明人は、よけるが下の岩につまずいて一弾横腹を貫通した。

最悪な事に、下は岩だったため砕けた石が明人の体に当たる。

「っ・・・!はは、頭から血が出てきましたよ。」

「大丈夫?ここは降参そた方がいいんじゃない?死ぬよ!」

キュウはまだまだ余裕だった。

すたすたとキュウは明人の近くまで寄って、明人の頭に銃をかざした。

「降参したら？」

「……。」

明人は黙り込む。

そして、明人は口を開いた。

「降参……。」

にやっとキュウが口元を上げた瞬間、

がっ！！明人はキュウの足を引っ掛けて、キュウのバランスを崩した。

「降参しませんよ！！！！」

どすっ！明人は、キュウの腹部を剣でさした。

この剣は、魂を浄化させるための物だから……。

「うっ……ま……まだ大丈夫よ！刺されたぐらいで！！」

「この剣は、魂を浄化させる為の物ですよ？もう終わりです。」

明人は剣をしまってから、

「天国でお会いできるといいですね。」
といった。

キュウは煙となってきたていった。

第三十四話 最後！（後書き）

「キャラの伝言板」

作者「コメント、評価まってるよお〜！」

明人「まってまあ〜す」

実古「そ・それだけ？」

第三十五話 レオの「飯」。

「明人さん！」

「！！レオさんじゃあないですか！」

（メモリーカード使ってる！）

レオは、即座に状況を理解し、それから

「近くに空き屋がありましたので、そこまでみんなを……。」

「わかりました。」

明人は、脇に実古を、背中に百合花をおぶった。

「レオさんは、優をたのみます。」

「ああ……はい。空き屋に、伊奈さんが待機してますんで。」

てくてこ道があるしていると、レオがいきなり話し出した。

「姉は……、中学校三年生の時他界しました。私たち一族は、も
とから

地獄へ落ち、大王を継ぐと決まっているそうです。」

「……。」

「地獄で家族四人で仲良く暮らしていたのですが、父が大王の座を、

僕か姉に譲ると言い出してから姉はおかしくなったのです。
そして……、」

すると明人が、

「家出ですか？家出ですか？」

と言い出したので、レオはおかしくなって、笑ってしまいました。

「ははっ違いますよ、とうとう今の状況に至ってしまったのですよ。」

「

「レオさん……お姉さんの事……。」

するとレオは明人に笑顔をむけ、

「いいんですよ、天国で元気にやってくれてれば。明人さん、ありがとうございます。」

レオがはっと気づき、

「そういえば、明人さんメモリーカード抜かないんですね。」

「ああ、今抜いたら倒れちゃいますからね。」

ふふっと笑った明人をレオは心配そうにみつめる。

「あ、ここです。」

レオが指差したのは一階建ての家でした。

かちや。

「あ、明人くん、レオくん！」

玄関で伊奈さんが出迎えてくれた。

「はは、伊奈さん、こんにちは。」

すたすたと中へ行ってしまった明人をみて、伊奈は

「！？レオくん」

ビククリしているようだ。いつもと性格ちがうから……。

「メモリカードだよ。」

「ああ。」

百合花、実古、優の治療が終わって、皆を和室に寝かした後、

「明人君、治療しますよ。」

「いいえ、結構です。それより皆の様子を見てきますね。」

ばたん。

和室のドアを閉め、中へ入っていった。

「あ……。」

レオが止めようとしたが、遅かった。

第三十五話 レオのご飯。(後書き)

「キャラの伝言板」

作者「伊奈さん、レオのごはんってどんなのですか？」

証人I「はい、前にてんとう虫が入ってました。」

《プライバシーの為、音声は変えてあります。》

明人「さっき、伊奈さんって言ったよね！？プライバシーってなに
！！？」

作者「いいじゃん。」

証人I「では、さようなら。」

明人「最後まで！！！！？」

第三十六話 記憶

あの恐ろしい戦いから、四日がたった。

その頃には、皆意識を取り戻していました。

皆が意識を取り戻したと同時に、明人はメモリーカードを抜いた。

かちっ

「・・・げほっ！げほっ！！」

明人は、いきなり咳が出始めた。

「あ・・・明人！」

百合花が近寄ったその時、

ぱたり・・・

明人がたおれた。

「！！伊奈さん！急いで手当てしないと！！」

レオが伊奈さんと治療し始めた。

出来る限り治療するが、怪我が大きかったためなかなか良くならない。

すると、優が、

「伊奈さん、なんで明人だけ治療してなかったんですか？」

「明人君ね、自分はいいつて言っつて皆の看病（特に何もしてないが）してたのよ？」

伊奈が心配そうに明人を見る。

レオがこちらにやって来た。

「だいぶ回復しましたよ。」

実古は、ぱあつと明るくなった。

「本当にいい!？」

すると、レオもニッコリわらって、

「本当ですよ。」

と返した。

二時間後

「うあ〜。」

明人が起きた。

「あつ明人!」

百合花がよつていく。

「明人・・・本当に・・・本当に・・・」

「？」

ん？と笑顔で首をかしげる明人。

「馬鹿！！」

バコーン！！

百合花ボカボカ明人の膝をたたいた。

「いててて・・・。」

「馬鹿！あほ！無茶するな！お前は馬鹿だ！！」

ばかばか殴り続ける。

明人は、何がなんだかさツパリだったが、百合花の目が少し涙ぐんでいた。

今は黙っていることにした。

「明人お、大丈夫？」

てくてこ実古がよつてきた。

「ん？なぜか頭と腹が痛いけど・・・なんでだろうね？」

首をかしげる明人。

そんな明人の頭をくしゃくしゃなでる優。

「ま、無事でなによりだ。」

「ん？そういうえば、皆怪我は大丈夫なの？そうとう酷かったけど。明人は、メモリーカードを使う前までの記憶はあるらしい。」

「「お前の方が怪我酷いぞー！」「」」

みんなに言われて明人は笑うしかなかった。

「んーどうしてこんな怪我したんだっけ？ちょっと思い出してみる。」

明人は「うん」とうなり始めた。

「メモリーカードをつかって・・・。」

「つかって？」

レオが聞き返す。

「うん・・・。」

「そうだ、キュウに切りかかったのだけど、よけられて次に銃を向けられて・・・」

よけようと思ったけど、石でバランス崩してしまって・・・腹を打た

れて貫通したんだ!」

明人がちよつとずつおもいだしていく。

すると、百合花が、

「頭の傷はどうしたんだ。」

「ええつと、確か・・・貫通した先は、岩で・・・岩が砕けて頭に当たったんだっけ?」

頭に巻いてある包帯をさすりながら明人が言う。

たまに傷口を触ってしまい、「痛い!」といているが。

「ええつと、どうやってここまで運んでくれたの?」

実古が質問する。

「確か・・・脇に実古を抱えて、背中に百合花をおぶって来たとおもうよ?」

すると優が

「俺は!!?」といつてきた。

「レオ君がはこんでくれたとおもつ。」

レオがははつと笑っている。

「なんだっけ?レオ君と何か話してた気がするんだけどなあ。思い出せないや。」

百合花が、不思議そうにしている。

「なんで、明人の記憶が途切れ途切れなんだ？」

すると、レオがその答えをいった。

「メモリーカードですよ、そのメモリーカードは明人君自身の能力を上げる

物で、その能力がすごく上がるので、上がりすぎて性格も変わるんですよ。」

余計なことは、全部取り除かれますからね。」

「性格……どんなのだろう？」

明人自身はよく分からないようだ。

「普段の明人君じゃあ片手で実古さんをついで片手で百合花さんをおぶるなんて無理ですし、剣が使えるようになるのも、余計な恐怖心が

無くなったからですよ。」

ぐさっ

明人の普段の駄目さがよく分かる説明で、明人は少し傷ついています。

「明人には余計な事が多すぎて性格も大きく変わるんだな。」
最後の百合花の一言で明人はすねた。

第三十六話 記憶（後書き）

「キャラの伝言板」

作者「結構書いたなあ。」

明人「本当だ、珍しい……。」

百合花「頭でもうったか？」

作者「酷い！」

第三十七話 風船(?)

明人の大事をとって一日休む事にした一行は、もう少しこの場所に留まる事にした。

「しかし、やっと人間界に戻れるな。」

百合花は、熱いお茶をずっとすすった。

「本当だねえ〜〜!」

皆は待ちきれない様子だ。

だが、この明るいふ陰気は、レオの言葉によって壊される事となった。

「でも、皆さん。鬼ランクAの三人をやっつけなくちゃまた大王の後を継いで同じ事を繰り返す事になるよ?」

「え……。」

百合花、実古、優はかたまった。

+++++

明人は、隣の和室で寝転がっていた。

「あああゝ暇だなあ……。すごく良くなつたし、もう元気なのにく。」

ぶつぶつ言いながら、隣で本を読んでいるレオに話かける。

「暇だよ、レオ君。」

「え？そうですか？」

「うん。」

「……それなら、ちよつと運動しましょうよ。」

レオが本にしおりを挟み、近くに置いた。

そして、むっくり立ち上がって、隣の部屋へ皆を呼びにいった。

皆が集まった。

「それじゃあ、皆さん。運動しましょう。」

実古は、めんどくさそうに髪をいじっている。

「運動……。なにをするのお？」

「えつとですね……。Aランクに勝つために、トレーニングしましょう。」

「「運動じゃない!!!」」

「?まあ、今から、対戦してもらいます。あたまたに風船をつけて、相手に割られたら終わりで!」

レオは、カラフルな風船を用意した。
そして次に紙をカサカサとだし、

「じゃあ、対戦相手をいいますね。」

百合花 vs 優

実古 vs 伊奈

明人 vs レオ

「れっレオくん。」

おそろおそろ手を挙げる明人。

「レオくんって、ランクAだよな?俺、死ぬって。」

まだ、人生楽しみたいし、老後はのんびり暮らしたいんだア〜・・・

「

「大丈夫ですよー。大王も、ランクA以上だったし。」

「いや、無理だった。」

そんな明人を無視し、みんなは風船を頭にとりつけた。

実古たちは、庭。

百合花達は、屋上

明人たちは、裏庭
で戦う事になった。

バトル開始

+裏庭+

「レオくん、俺やだなア。」

「じゃ、始めましょうか？」

軽く無視。

「あ、明人君はメモリーカード差し込んで。」

「いや、メモリーカード使ったら、意味無くないですか？」

「いやいや、キレバージョンで力を上げておけば、普通バージョンでも

力は上がりますから」

レオはにっこり微笑んでみせた。

「う……わかった。」

カチツ……

「……………。」

（目つきがかわった……ってことはキレバージョン？普通バージョンから

キレバージョンへ変わる時間は、かからなくなりましたね。）

「明人さん？大丈夫ですか？」

くるっ……

明人は、レオに背を向けた。

「どこ行くの！！？」

慌てて明人のもとに寄り、顔を覗き込んだ。
明人の顔からは、不安の表情が滲み出ており、ますますレオは不安になった。

「明人さん！」

「……、すぐに確かめないと……。」

明人はそれだけ呟いて走りだした。

だんだん遠くにいつていく明人を見てまたレオが慌てて、

「あつ、修行中です。まずは修行しないとっ！」

レオが言い終わってすぐ後に明人は振り返り、目にもとまらぬ
速さで走り、拳でレオの風船をわった。

レオは異変に気づき、ガードしたが遅かった。

ばああああん!!!!

「……。」

無言ではらはらと落ちる風船の欠片を見つめる。
風船の欠片はまるで蝶のようだ。

「……明人さん、Aランクの事ですか？」

こくつ。

明人が頷く。

「すぐに・・・分かるとおもいますよ。」

無言のまま明人はメモリーカードを抜いた。

くらくらっ!!

ばたーん!!

すぐにぶっ倒れてしまった。

第三十七話 風船(?) (後書き)

キャラの伝言板

作者「ほったらかしですみませんでしたあ!!」

第三十八話 修行おわって(前書き)

すみません！

いろいろと忙しくって(汗)

第三十八話 修行おわって

実古vs伊奈

「ねえー実古ちゃん？」

「なあに???伊奈さん」

二人は並んで座っている。

のんきにここ十分ぐらい話し続けている。

「もう面倒だからやめようか」

「そうですねえ〜」

実古vs伊奈勝者不明。

優vs百合花

「さあ、優。さっさと終わらせるぞー!」

つよくにらまれた優は、ややすねる。

「百合花、百合花は、守備中心だろ?なら俺と戦う必要は……」

ぼかーん!!!

百合花は必死で逃れようとする優の頬を思いつきり殴ってやった。

(少々スカッとしたな)

「なな何笑ってるの!!!?」

「さ、ペーちゃん。あのウザイ奴をぶつとばすぞ。」
「ペー。」

「いけッペーちゃん!」

ひぎゃああああああああああッッッッッ!!!

優はぶつとばねたわけ。
めでたし2!

「おいツめでたくねえよ！」

またまた明人方面

「……………」

「……………」

「……………あれ??？」

レオは首を傾げる。

「明人君……起きるの遅くない??？」

仕方なく部屋まで明人を担いで帰ることにした
レオ。

結構担ぐのはきつい！

「……ただいま……」

みんな帰ってきたようだ。

明人は相変わらず気絶(?)している。

「あれ？明人コテンパンにやられたんだね〜。」

最初に気づいたのは百合花だ。
それに続いて実古、優も

「お、伸びてるな。」

「惨敗だねえ〜。」

「いえいえ。明人君は僕に勝ちましたよ。」

一瞬の沈黙が訪れた。

「じゃあ・・・なんで??」

百合花は何か不思議なものを見るような目で
明人を見ている。

「さあ？メモリーカード抜いたらぱったり倒れちゃった
んですよ？いつもならすぐ目を覚ますのに・・・。」

「しばらくほっておこうよ〜」

という実古の一言で一同はほっておくことにした。
結構ひどいよう実古！

第三十九話 バレンタイン？

実古の一言で放置されることになった明人は
夢を見ていた・・・

~~~~~

何故か学校にいる明人。  
バレンタインらしく、教室中にチョコレートの匂いが  
ぷんぷんする。

今年はチョコかなあ・・・

そんな事を思いながら席につく明人。  
口まで甘くなってくる・・・。

と、机の中を見てみるとぎっしりチョコが入ってるではないか！

「・・・？」

どういうことだか分からず首をかしげる明人に女子  
達がわんさか群がってくる・・・

「明人君ーーーー！！」

チョコを無理やり渡される。

だんだんチョコは床にこぼれ、明人の周りを埋め尽くしていく

「も、もういらないよぉー！ー！ー！ー！」

ついには男子までがチョコを渡しだし明人はチョコにおぼれ始める

「むが……つもご！ー！ー？

ぐわあああああああああああつ！ー！ー！」

~~~~~

がばっ！ー！

「夢？……嬉しいような嬉しくないような微妙な夢だったよぉ……。」

「あ、明人さん起きましたー！」

伊奈が叫ぶ、

「あ、明人さん、私チョコ作ってみたんですう！
食べますか？」

「む……むがああ!!」

ばたーーーーん!

「わわっわまた倒れた!!!?」

「伊奈さん、無理やりでも食わせてやれば起きるかもだぞ?」

百合花が、どこか邪悪な笑みを浮かべている……。

「それいい考え!」

「わ・わ・元気! 元気でもチョコはいらないう(泣)」

むっくり起き上がる明人。

「召し上げれV ハート」

強制的に明人の口にチョコが押し込まれてゆく。

「むがつ……ん??」

すっごくおいしいですね、コレ……も……」

「でしょお? そのチョコに回復を高める術もかけといたんだから!」

さらっと凄い事をしてくれます伊奈さん。

第四十話 落とし穴

皆リビンググにあつた机に座っている。

明人も起き、これからについて会議するのだ。

「えーっと、Aランクは、たしか・・・あ、地図で言つとこじ。」

レオは地図の何か塔のようなものを指差した。

実古は不思議そうな顔をしている

「ここは何の建物なのお？」

「建物みたいだな。」

百合花も淹れたてのコーヒーを皆の前におきながら覗き込む。

一名はオレンジジュースだが（実古）。

「私が説明しますね。ここは、地獄に来た人が載つてるリストや

大事な資料がたくさん保管されている地獄塔っていう所なんですよ。

「

「ふーん」

ちゃんと分かつてるんですか、明人君

「じゃあ、ここに行けばAランクにあえるってわけだな！」

「そうなります。」

「伊奈さん物知りだあー」

ガタ………

いきなりレオが立ち上がる

実古は怒ってしまったのかと思い

「あつあつレオ君も物知りだろう？」

慌てて付け足す

レオは苦笑いをする。

「ちがいます。そうじゃなくて、行きますよ？」

………ん？

伊奈以外の全員の頭に『？』マークが浮かぶ。

「だから……。
今から、いきますよ。地獄塔にね」

「『『『ええええッ』『』『』」

+++++

「何で……こんな早くに……」

うつむきながらとぼとぼ歩く明人。

もう少し休みたかったらしいですな。この様子だと

「ねえねえレオ君、地獄塔って近い？」

「うーん……近いつていうか、ここなんですよね。」

スイッと指差す。

目の前には確かに塔があったのだ。

「え？え？さっきのアパートから一分も歩いてないぞ？
地図もこんな端っこに塔がのってるし！」

優はあわてて地図を見直す。

「地獄塔はね、とつても重要な所だから地図にも場所を載せてはいけないきまりなの。」

そういつて一歩踏み出した伊奈さんが一瞬で姿を消した。消した。と言うより正確には穴に落ちたのだ。

「ひゃあああああ!?!なんで落とし穴!?!」

「い・・・伊奈さん?」

と、また一歩踏み入れたレオも消えた。

「ここにも落とし穴あああああああああ!?!」

「「「「「・・・」」」」」

あまりの出来事に声も出ない四人

「ここは通さない。」

透き通った綺麗な声が聞こえてきた、と思ったらいきなり少女が現れた。

白髪の長い髪をなびかせる少女は続けてこういう

「私はRED。Aランクの一人よ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7740c/>

地獄 アドベンチャー

2010年10月10日19時39分発行